工芸と迷宮の街

橘高　有紀

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
工芸と迷宮の街

【Ｎコード】
Ｎ９７８６Ｉ

【作者名】
橘高　有紀

【あらすじ】
星をわたる列車に乗って、少年たちは旅に出る。遠い異界の地へと――
リンとエドを乗せた星間列車が次の停車駅『工芸の街ヴィーグエング』に到着した。工芸の街では、ちょうどランタン祭りの真っ最中だ。二人は祭り見物へと向かったが、そこでリンの鞄が盗まれてしまって……

1

エルザは一瞬を待っていた。物陰に潜み、その一瞬だけを。じくじくと痛みを訴える右肩を押さえ、いらいらと煙草を噛んだ。足元には踏み潰された煙草の吸殻が五本転がっている。

遠くでアナウンスが聞こえ、歓声が上がった。出て行くものを見送る『ヒトビト』の姿、入国するものを歓迎する『ヒトビト』の姿、それらの花道を誇らしげに列車が空へと駆けのぼり、また駆け下りてくる場所――ここは星間列車ステーション『ラジィン』のプラットホームである。用務員が使用する通路の影からエルザはそれを睨みつけるように見ていた。

平和なようすに苛立ちを隠せない。どうしてこの場所は、ここまで笑顔であふれているのだろう。

（ロイにハル、リィは何をしているの。もうじき列車が来るというのに）

来るはずの連絡が来ない。集まるべき仲間が時間を過ぎても現れない。苛立ちの中に一抹の不安がよぎり、彼女はかぶりを振った。彼らがこないはずはない。だって昨日別れたときに約束をしたではないか。それに……と考えてエルザは心が研ぎ澄まされていくのを感じた。それに、彼らがこなくても、誰か一人が実行せねばならない――

エルザの視線はぐるぐると民衆の中を移動する。祭りらしく、華やかに飾り付けられたホームは、色とりどりのランタンがそこここにあった。大きさも形も不揃いの、世界にたった一つしかない手作りの工芸品たちだ。夜になれば幻想的な風景を映し出してくれるだろう、灯りたち。

笑顔にあふれたヒトの群れは、エルザの心まで届かない。彼女の求めるものと、彼らのぬくもりは同じであって同じではないのだ。家族連れや、恋人たちの姿が視界をよぎるたび、舌打ちしたい気分

になった。いい気なものだ。ここは、なんだってこれほど平和なのだろう。妬ましい。
ちょうどそのとき、また別の列車をむかえるアナウンスが響いた。ああ、来た。あの列車に、乗せられているのだ。この旅が何なのかを、知らされていない子が。
エルザは真っ黒なコートの上から、右肩を押さえた。間断ない痛みをこらえるように、ぎゅっと。――私一人で、見つけられるだろうか。あの中に、入り込むことができるだろうか。
（ダイアン、あなたの届けてくれた情報、感謝しているから）
祈るようにまぶたを下ろした彼女の背に、聞き覚えのない声が突き刺さった。冷淡な、男の声だ。もしかしたら声を意図的に変えているのかもしれないが。
「残念だったなエルザ・スコーピオ。お仲間はもうここにはこない」
息を飲んだが、エルザは振り返ることなく駆けだした。前方ばかりを見ていたせいで、背後まで気の回らなかったことが、悔やまれる。いつも仲間といっしょに行動していたからなおさらだ。すると、眼前でなにかが弾けた。光線銃（レーザーガン）だ。殺傷能力は低いが、身体を撃たれれば行動不能へ容易に陥る。……油断した。
「動くな。止まらないと撃つ」
鋭い制止の声に緊張感が一気に高まる。後一歩、とエルザは歯噛みした。後一歩で群集のいるホームへ出られたのに！　エルザはこくん、と喉を上下させる。厄介な相手に捕まった。相手はだれだ？
連邦警察？　政府の犬？　賞金稼ぎ？　それとも――
かつんかつん、と靴音を響かせ、何者かが近づいてくる。エルザは渇いた唇を舐め、目を猫のように細くした。大丈夫、私は逃げきることができる。ここからホームへ出ないよう銃口がポイントされているのは、いい例だ。しかも光線銃である。相手はエルザを殺すわけじゃないらしい。ならば――逃げられる。
そのとき、一際大きな歓声がホームを支配した。追跡者の気がわずかにそれる。エルザはヒトごみにまぎれようと、ホームへ飛び出

した。ヒトの多い場所を狙って、突っ込んだのだ。
「待てっ、止まれ！」
だれが待つの、とエルザがするするとヒトの波に潜っていく。
「わあ！？」
うまくヒトごみをかきわけていたつもりが、バッグがなにかに当たった。右肩の激痛をこらえて振り返れば、列車の前でまん丸眼鏡のヒト族の少年が、うずくまっている。こんなところで屈めば車線に落とされる――と、彼女が手を伸ばす前に、列車から降りた猫族の少年がその子を立ち上がらせた。
（あの子）
ネコ族の少年に、エルザの目は釘付けになった。一瞬呼吸を忘れそうになる。間違いない。あの子は『シーカー』で見たことがある。そのときはもっと幼くて小さな子どもだったけれど……印象的な青い髪、異種族でもわかる整った顔立ち……間違いない。あのヒトにそっくりだ。彼ほどの子が護衛もつけず、ひとりでいるだろうか。こんな辺境の地に？
どくん、どくん、と心臓の脈打つ音が聞こえた。
（なら……あの子が）
助け起こされたヒト族の少年へ、エルザはゆっくりと視線をずらした。そしてたった今到着したばかりの列車を改めて確認する。星間列車『クィダズ』行きから降りてきたなら。
（ああ、見つけた）
一人では見つけられるはずがないと、思い込んだ矢先だった。考えてみたら、早々ヒト族に出会うはずがない。ここは、人外の領域なのだ。
「なにやってんのさ、どんくさいね。落ちるよ」
刺々しい口調のわりに、きちんとメガネの少年を助けている彼の名前は、エトムント。エトムント・エスツェット。ああ、知っている。大きくなった……。まだ子どもだけどしっかりとしている。そして一方のメガネの少年は、はふはふと息をして、おっとりした笑

顔をしていた。どん臭そうな子どもだった。自分と同じヒト族の子ども。

こんな子がひとり、このような異界へ送り出されてきたのか。

「だってこんなにヒトがいるんだもの」

前がよく見えなくて大変だね、とメガネの少年が笑う。

エルザは刹那、小さな旅人へ手を伸ばし――逡巡の後、歩を進めることにした。追跡者らしい姿は視界になかったが、油断できない。今、あえて危険を犯す必要はないのだ。まずはヒトビトの流れにそってホームを出る。それから今後について考えなければ。今日が、ランタン祭なのは幸いした。多くの観光客が溢れかえっている。これを逆手に取ればいい。

追跡者の声が脳裏に再生される。

『お仲間はもうここにはこない』

帽子の下でエルザは表情を険しくさせた。ロイにハル、リィたち……仲間の顔が浮かぶ。『アパリション』は堕ちたのか。『ビリグロム』は、やはり当てにはできなかった。その予感はあったのに。

足元が瓦解していくのを、エルザはずっと感じていた。組織が大きくなればなるほど、不安は募った。見知らぬ仲間たちは多すぎて、把握できない。彼らすべてが自分の意思に賛同してくれているのだと、思えない。立ち上がった当初は少数だったが、あれほど意気投合できていたのに。

築くまでの時間と労力は、一瞬にして消えてしまう。ヒトというものは、集まれば争いあう生き物だ。同じ志を持っていても、主張がそれぞれ違ってくる。なんて醜いのだろう。その一端をエルザ自身も担っている事実が、歯がゆい。

落ち込みかけた自分を叱咤して、エリザは気を取り直した。

（ダイアン、あの子ね。あの子が、リン・ユイ）

エルザへ『くれぐれも気をつけて』と警告してくれた友人を脳裏に描き、深呼吸を繰り返す。この警告が届く前から気づいていた。察してはいたのだ。しかし、反逆を防ぎきれなかった。

エルザ自身も、さっさと逃走しなければ。こんなところまで追っ手がきたなら、アジトはとっくに押さえられているだろう。信頼できる仲間のところへ向かう手はずを、整えねばならない。しかし、脱出と同時にあの子たちを保護できるだろうか。

後ろ盾と親しい仲間をなくした状態で、なにができるか。エルザは考えに耽りながら列車のホームを後にする。だいじょうぶ。ひとりでも動いてみせる。最初は、私ひとりだった。そのころに戻ったと思えばいい。そのために全てを捨てたのだから。

「思ったより寒いね。マフラーと手袋、どこにやったかな。エドは平気？」

「うん、コート着るから。あったかそうだね、それ」

「ローラおばあちゃんが、編んでくれた奴なんだ。だけど、ヒト多いねぇ」

「お祭りだって言ったでしょ。年に一度行われるランタン祭りは、一年で一番夜の長い一週間だけ行われるんだって。さ、行くよ。五時間たっぷりあるんだし、まずは手紙を出してそのあと街を回ろうね」

子どもたちの会話も遠くへ消えた。エルザはふうと息を吐きだし、表情を引き締める。

「必ず、ここから逃げ切ってみせる」

そして、守り通してみせる。私たちの未来を。

2

あごが外れんばかりに口を開き、凝視してくるエドへ、丸めがねのリンは首をかしげていた。

ヒト族のリンは十歳ほどの子どもで、この少年を表すなら『極貧民』という言葉がふさわしい。身につけている何もかもが、埃をかぶった廃棄寸前の代物だからだ。丸めがねの奥の青い瞳が、彼の持つ一番のお気に入りである。

もう一人の少年はネコ族で、歳ならリンとそう変わりないが、『極貧民』とは対照的な『貴族』然としていた。リンの『王子さまみたい』という言葉がすべてを語っているような少年だ。鮮やかな青の、猫のような容姿。リンは、彼のキラキラした金に緑がかった瞳が大好きだ。

ふたりの出会いは置いて、現在リンは、エドが『王子さま』の枠から外れるような顔をしていて困惑した。

「え？　ちょっと待って」

ぽかんとしたエドの顔が、ひきつったものへ変化していく。

「今キミ、なんて言ったの。手紙ってほんとうに紙の手紙を言ってるわけ」

リンは顔を赤くして困った笑顔を乗せた。

「やっぱり手紙じゃなくて、ハガキのほうがよかったかなぁ。でも書きたいことがたくさんあったんだ。それでいっぱいになっちゃって」

「そうじゃなくて！　紙なの。紙の手紙なの。本当に」

リンの襟を締め上げる勢いで、エドが食ってかかる。

「手紙って……これ以外にあるんだっけ」

エドが絶句したのは、言うまでもない。

ここは工芸の街、ヴィーグエングの小さな国際郵便局だ。現在停車中のクィダズ行きの列車は出発時刻まで五時間とかかる。正午に

ヴィーグエングへ到着したので、ちょうど五時に出発だ。そのあいだ、観光と銘打ってふたりは列車を降りたのだった。ヴィーグエングはタイミングよく祭りだったので。

リンの手紙を出すために郵便局へ訪れたが、ここまで混雑しているのは祭りのせいだ。誰も彼もが小包を手にしている。恐らく、祭りのみやげ物を配達してもらうためだ。その順番待ちでリンが「切手代どれぐらいすると思う」と訊いたために、エドがあんな反応を示したのだ。

リンは唖然としたエドの袖を引っ張って、耳打ちした。

「ねえ、どうしたの、エド。変だよ」

「変にもなるよ。キミの住んでたとこってどれだけ辺境なのさ。アナログすぎる」

「え、手紙届かないかな。第三星海の」

「そうじゃなくてね」

今にも頭をかき回しそうなエドは、ぐりんと首を回した。リンに詰め寄って、金色の瞳を光らせる。

「メール。メールって手段を考えないわけ？　通信（デンワ）とかさ。非効率で手間ばかりかかって、ナンセンスだよ手紙なんて！　ああ、それとも高級感を出したいの？　手紙なんて出すヒトが、今どきいるなんて！」

立てられたエドの人差し指がリンの鼻を押す。リンは圧倒されながら、ずり落ちた丸眼鏡を押し上げた。

「めーる……？」

リンの返答によって、エドが固まった。ピンと立っていた耳が下がり、ふさふさのしっぽも下がる。

「ご、ごめんね。よくわからないんだけどめーるって何？　どうやったらお家まで届くのかな」

すると、オーバーに凹んでいたエドがやおら顔を上げた。思案顔のままリンを引っ張り、

「さっき――第三星海の、どこって」

「え、第三惑星『フォーグル』だよ」
ついにエドの膝まで折れ曲がった。窓口へと続く長蛇の列のど真ん中で。声はうめくように絞り出される。
「『フォーグル』……！　キミ、『フォーグル』から来たの。よりにもよって、あんな星から」
エドは眩暈がする、と眉間に指を当てる。リンが不安になって声をひそめた。
「『フォーグル』だって言ってなかった？」
「聞いてないよ。聞いてない。じゃあ『中立都市（エンジャーグル）』まで一月ほどかかってない？　特急を使っても二週間じゃなかった？」
「それがどうかしたの？　乗り換えもなかったし……そんなにビックリするほど変じゃなかったけど」
「キミ、ほんとうにあの星から……」
戸惑い混じりにうなずくリンをまじまじ見やったあと、エドが再び嘆息した。
エドが肩を落とすのも無理はない。第三星海第三惑星『フォーグル』は、長期にわたって戦争を繰り返してきた星のひとつだ。戦争の核となった星ではないが、主導権を握っている強国ビザノールは強硬派で響いている。軍事介入にだって積極的にしている反面、平和主義者の一党も多いアンバランスな星としても知られている。
現在、第三星海は沈黙しているが、いつか再び戦争は始まるだろう。そのとき『フォーグル』が音頭をとっても、不思議ではないとされていた。
「手紙、切手はあの表で確認できるよ。ここからだと五百リオからって書いてあるから、値段は確認したほうがいいかも。キミの言う通りだ。メールなんて多分無理」
『フォーグル』は星全体が電磁干渉を起こしているため、機械系が滅法弱い。長い戦争は、そこに住む住民へ機械という恩恵を奪ったのだ。仮初の休戦宣言から早七年が経過した現在も、いまだ一部の地域では復興のめどが立たない欠陥惑星だった。大国ビザノール周

辺のみ、電磁干渉をキャンセルできるシステムが働いているため、貧富の差も拡大の一途を辿っている。ビザノールが『フォーグル』を代表する国までのし上がったのは、技術の独占という影があった。

難民が『フォーグル』を含む第三星海を逃れ、あちこちに避難を開始したのはもう十年も前の話である。

エドが「だから機械音痴なんだ、まったくもう」と苦った。リンは瞬きながらも順番が回ってきたので、カウンターへ向かう。エドの態度は気にかかるが、手紙は出したかった。背伸びしてえっちらおっちら交渉をはじめる少年を、エドが叩く。

「ねえ、向こうで通信（デンワ）してくるから、終わったら待っててくれる？」

うん、とリンは屈託なく笑顔をみせ、手紙を出そうと悪戦苦闘する。エドは苦渋を隠しきれないまま、ふらりとヒトごみに消えた。

――どうしたんだろう。何かおかしなことあったのかな。だが、エドのことを考える間は与えられなかった。受付のヒトに話しかけられたので。

一番安く、一番届くのに時間のかかる方法でなんとか、手紙は出せた。共通語での説明に手間取ったが、一人でできたのだ。受付待ちのシートに座ってリンは、安堵した。この程度で四苦八苦したとアニエスが聞いたら笑うだろうか。それともよくやった、と誉めてくれるだろうか。

財布の中身を思って、リンは苦笑する。手紙ひとつがどうしてあんなにも高いのだろう。この先もどんどん高くなっていくはずだ。

途中教えてもらった『メール』のほうが格段に安いとは、知っていた。しかし、『フォーグル』に通信機だなんて文明の利器を期待できなかった。なんせリン自身が触ったことも、見たこともない。無事に内容を送信できても、家族が見るには、今リンが払った倍以上の代金を請求されるだろう。

「……アニエス」

自分の姉代わり、母親代わりの女性を思い出した。大切な家族の一人で、リンが旅に出ることになったとき、最後まで反対し、最後

には背中を押してくれた存在だ。

しっかりね、気をつけていくのよ。

今でも別れ際の言葉が、耳の奥に残っている。誇りを持っていきなさい、と言ってくれたアニエスが力強くて、励まされた。知らないことは恥ずかしいことじゃない……アニエスが教えてくれたことだ。

「しっかりしなきゃ」

こんなことで凹んでいられない。まだまだ旅は続くのだ。

リンが涙をぬぐったそのとき、こつ、とヒールが床を叩く足音が止まった。背後に誰かが立ったのだ。

「わあ、まさかこんなところで同族に出会えるなんて！」

突然リンは誰かに抱きすくめられていた。シートの後ろから羽交い絞めにされたのだ。突然の出来事に思考が吹っ飛ぶ。誰かの手が胸の前で交差されていた。仰天して抵抗したが、抜け出せない。すると、くすくす笑う気配が背後からした。

「あら、困った顔もかわいい」

抱きしめてくる誰かは、耳元で囁いてリンの頬にキスをする。「な、え！？」、と驚きに一瞬で頬が上気した。とりあえず、抱きついているヒトは女性だ推測する。だが、どうして抱きしめられてるのか。なぜキスされたのかわからない。しかもガッチリ捕まったせいで、逃げようともがいても、抜け出せない。

「あの、ちょっと、あの」

「ねえ、抱き上げていいかしら。同族なんて久しぶりなのよ。何だか安心するわ、ヒトってこんなだったわね」

リンの返事さえ聞かず、胸の前で交差された手が脇へと入った。そのまま引っ張りあげられて、少年は目を白黒する。シートから体が浮いて、誰かの腕の中にすっぽり納まっていた。ふわり、と香水の匂いがする。誰かの体温を感じ、ふとリンは懐かしくなった。そ

うだ、列車に乗る直前も、アニエスに抱きしめられた――
「ねぇ、坊やのママやパパはどちらに？」
冷水をかけられた思いで、リンは相手の顔をやっと直視した。続いて目を丸くする。自分と同じヒト族だったのだ。
想像通り、女性だった。分厚い唇に真っ赤な紅を塗った、目鼻立ちのくっきりした女の『ヒト』、いや女の人だ。じっと見つめられて、再び顔が赤くなり、リンは目をそらした。キスされた頬をこすると、手に赤い色がついて情けなくなる。
彼女は藤色のスーツ姿だった。太ももがむき出しのタイトスカートにはぎょっとしたが（リンの生まれ故郷では、女性は長いスカート姿が多かった。足を見せたりしないのだ）、ピアスや指輪、チョーカーがとても似合っている。派手な格好だったが、きれいな人だった。
しかも力持ちで、赤ん坊よりははるかに大きなリンをひょいと抱き上げいる。身長はアニエスより少し高いぐらいか。
「もしかしてあなた、迷子なの？　ああ、お祭りですごいヒトだもの、はぐれちゃっても無理ないわね。警察へ行ったほうがいいかもしれないわ。今ごろご両親は心配なさっているはずよ」
話が妙な方向に向かって、リンは慌てた。連れは一人だけで、しかも同じぐらいの少年だ。警察へお世話になったら、街を回れなくなる可能性がある。下手をしたら列車に乗り遅れるかもしれない。
「あの、ぼく、友だちと来てて、その、お父さんとかお母さんは来てなくて」
「まぁ、この街の子？　早とちりしてしまったわ。でも大荷物ね？」
ちらりとリンの丸いリュックサックを女性が一瞥する。リンは更に慌てた。
「え、その……ここで友だちを待ってて、あの、だから」
「とにかく、ヒトの多いところで一人でいてはいけないわ。この街はヒト族に対する偏見がないけど、観光客がすべてそうだとは限らないの。保護者の方がいらっしゃらないなら、なおさらよ」

今日は祭りなのだから、と女性が言う。
「あ、でも、エドが――」
警察なんて行ったらエドが困る。リンだって困る。しかし、女性はリンを心配してくれているのだ。彼女はリンの手を引いて歩き出した。かつかつとヒールを鳴らしながら、ポケットからサングラスを取り出した。
「ああ、これ？　私の目は光に弱くて、昼間はつけているのよ」
薄い紫の入ったメガネがきらりと輝いた。外へ出てしまったら、エドとはぐれてしまう。ゆったりとした歩調でも、大人の一歩は大きい。リンは引かれるまま小走りになって、ちらちらと周りを見やった。エドはどこまで行ってしまったのだろう。
「坊や、名前を教えてちょうだい。私はアベルよ」
リンが、なんとか決意をこめ立ち止まった。
「あ、あの！　ぼく、エドを待たないといけなくて」
振り返ったアベルがん？　とかがみこんで小首を傾げた。艶やかに微笑まれると何故か強く主張できない。うう、とリンは目をそらした。目のやり場に困ってしまうのは、華やかな女性がこれまで周りにいなかったからか。
「……ぼく、リン・ユイです」
「そう、リンくん」
アベルがにっこりと華やかに笑んだ。そうじゃなくって！
「あ、ああのぼく……」
エド、助けて。早く戻ってきて！
リンが内心で泣きそうな悲鳴をあげたときだ。
「あ！　貴様は昨日の！　こんなところにいたのか、ってうおわああああ！？」
どんがらがっしゃん、と派手な音と悲鳴と怒号が木霊する。振り返ったリンの目がまん丸に見開かれた。

3

「その画像の人物に間違いはないでしょうか？　リン・ユイという人物で合っていますか？　全然別人の可能性があると、疑っているのですが……」

エドはくらくらした頭で開口一番そうまくしたてた。薄い受話器の向こうでは、悠然と肯定する声がする。映像のカットされた通信では相手の表情などわからないが、恐らくいつものようにこのヒトは落ち着いているのだと思う。エドは彼が慌てているところなど見たことがなかった。身内の死でさえ、彼の冷静さは失われないはずだ。

そう……。例えば両親や兄の死に直面しても。彼の娘さえ、このヒトにとっては道具なのかもしれない。

ネコ族の少年はせん無い考えを、ふるふると首を振って追い払った。眉間にしわを寄せて、「本当に？」と疑い深く尋ねる。

『本当だとも。このことで嘘を教える理由はないだろう』

揺るがない平坦な回答は、少年に質問の無意味さを教えてくれる。エドは一つ息を吐くと、ぐっと声のトーンを落とした。事実をしゃべってくれるとは思っていないが、聞きたいことはいくらでもある。

「リン・ユイは『フォーグル』の民でした。なぜ彼が選ばれたのですか。ヒト族は『フォーグル』以外にも大勢存在しています。なぜ、あの星の少年なのです。……我々『シーカー』の女王のためとはいえ……」

後半は尻すぼみに消えた。脳裏に屈託なく笑うリンの姿が思い起こされた。エドの表情に苦いものが走る。

「リン・ユイは、この旅の意味を知ってるのですか。この選定はどのように決められたのか、教えてくださいませんか」

あまりに酷ではないか、と続くはずだった台詞は遮られた。リンは敵国の女王が絡んでいることを知っているのだろうか。もしかし

たら、身内を奪った原因たる存在を。ヒト族を圧倒的力でねじ伏せてきた、王のことを。

『気をつけたまえ』

やんわりした警告に、エドは口をつぐんだ。声には、否やを言わせない響きがあった。

『どこに聞き耳を立てられているのか、わからないのだよ、エトムント』

エドがハッとなり、慎重にあたりを見渡した。誰も少年に注目していない。ざわざわと熱気に包まれた、せわしない郵便局のカウンターだ。大勢のヒトがいる。リンのように手紙を出したり、小包を持っていたり、手ぶらだがイライラとカウンターの行列に並んでいるヒトがいる。ヴィーグエング（工芸の街）で一番大きな郵便局だからこそ、これほど賑わっているのだろうが――この中に敵対者も混ざっているのか。

不意にトントンと肩を叩かれ、エドは小さく飛び上がった。見れば「どうかしましたか」と、職員のクマ族が小声で尋ねてくる。「いいえ、何でも」という口と、首を軽く振った動きで、エドは職員を追い払った。

とりあえず大丈夫そうだ、と安堵したところに、通話相手が追い討ちをかける。

『傍受の可能性は低いが、ないとは言い切れないのだよ。わたしは確かに公共の機関を使えと言ったが、君から連絡を取る必要もないとも伝えただろう。その判断をするのはこちらだ。君ではないよ。……いいね』

やさしく諭され、エドが唇を軽く噛む。可能性を示唆されるまで、子どもを監視する者がいるとは思っていなかった。同世代の子どもと行動を共にし、気が緩んでいたのも否めない。この街が祭りだったことも一因か。浮かれていた感情や興奮が沈んでいく。

だがそれ以上に「子どもだから仕方ない」と認識されたことが面白くなかった。未熟者と一喝されたほうが、まだマシだ。仕事を任

されて有頂天になっていたのか。一人前気取りだった己をエドは恥じた。
しかし、自分が落ち込むことは許せない。ここで凹んでいたら、それこそお子様である。自分のできるやり方で、名誉を挽回せねば。
「今後、注意いたします。――ですがリン・ユイについてもう一度調べていただけませんか。もしくは、彼の選ばれた理由を教えてください。この通信ではなくとも構いませんので」
諦めずに食い下がると、通話口でふ、と相手の笑う気配を感じた。予想外にあたたかなものだったので、戸惑ってしまう。
「あの？」
『いや、すまない。君をバカにしているわけではないんだ。そうだな……、わたしが聞いているのはリン・ユイが――』
がーびびびっぎゃぴぎゃぎゃぎゃ……、突然通信にノイズが入った。え、と思う間もなくブツッという断線音がする。同時に響いたのは、悲鳴と重い機械が落ちたような音だった。
「は？　ちょっと待って、なんで急に……」
重要なところだったのに、何故切れる。連絡は取り直すな、と釘を刺されたばかりなのに。周囲を見渡すと、通話をしていた者たちは一様に顔をしかめている。局員に苦情を訴えている者もいた。僕のところだけじゃない？
困惑交じりでエドが受話器を置いた瞬間、誰かの怒号がした。ざわめく波はエドのところまで一気に押し寄せた。
なんだ？
ただならぬ雰囲気に、金がまざったグリーンの瞳は連れ（リン）を探す。切れた通信は気にかかったが、仕方がない。騒然となったヒトビトをかき分けて、リンがいるはずの場所に向かう。だが、そこに連れの姿はなかった。
「どいてどいて！」
どこにいった、とリンを探すエドの傍らを、藤色が抜けていった。思わず振り返ると、黒に近い茶髪と、藤色スーツの女が踵を鳴らし

ている。特徴のなさからヒト族だと一目でわかった。女は「どいて」と言いながらヒトゴミをするりするりと抜けていく。
その姿が埋もれる前に、今度はウサギ族の男が群集から飛び出した。
「待て、止まらないか貴様！　卑怯だぞ、こんな場所へ逃げ込むなんて！」
トレンチコートを翻し、ウサギ族特有の耳をぴょこんと立て、先ほどの女性を追いかけていく。こちらは女性ほどうまく身を捌けず、ヒトの群れをかき分けながらの『疾走』だ。誰かを突き飛ばし、跳ね飛ばして進んでいる。そのたび悲鳴が上がった。
「ちょっとやだ、何なの！？」
「すみません、通してください！」
「並んでいるんだ、他所を通れよ！」
「いいから通して！」
ウサギ族は温厚な種なのに、男は無理やり走り倒す。最終的に天井近くまで飛び上がり、身をひねって人ごみをやり過ごすアクロバットまで披露して、ウサギ族は走る。途中、「ごふっ」という潰れた悲鳴が聞こえたのは愛嬌か。
捕り物？
郵便省の注目を一身に浴びて、ふたりはフロアを激走する。そのうち我に返った職員が、「フーリー警部補、あの、お客さまのご迷惑になりますので外で」と訴えたが後の祭りだった。
待て、しつこい、諦めろ、人違いです、この盗人、違うと言っている！　なんて罵声とともに、あちらこちらで悲鳴が上がり、紙の束が舞い上がり、何かの倒れる音がした。台風が通ったような騒ぎだ。
視界の隅にぽかんとしているリンを捉え、エドはそそくさと近寄った。
「大丈夫だった？」
リンの手を引っ張ると、「……あ、エド」と間の抜けた返事があ

った。
「ぼうっとしないでよ、話しかけてるんだから。変なヒトがいたけど、大丈夫だった？」
　すると、リンがエドに詰め寄った。
「えええエド！　今、変なヒトがいて、紫のスーツで、サングラスで、ウォォッ～！　って入ってきて……ええっとそれで」
「騒がないでよ、みっともない。キミも見てたの？　二人だったよね、ヒト族とウサギ族で。何やらかしたのか知らないけど。――とりあえず出よう。手紙出せたんでしょ」
　電話は、とリンが尋ねてきたので、エドは肩をすくめて外へと促す。その途中、魂が抜けたように呆けていたヒトたちも、それぞれ動き出した。彼らは大してダメージを受けていないのか、口々に喋りだす。まぁ、今回はあの女性が怪盗フルムーンなのかしら。フーリー警部補も大変ね、と耳に入ってエドは不審に思った。するとそこここでひそひそと笑い声が立ちのぼる。
　でもアレが噂の、ふふ、ご覧になりました？　初めて見ましたアレを。ああもう、はた迷惑だね。こんなとこでやらなくてもいいのに。面白かったじゃないですか？　まさかアレが見れるなんて思ってなかったよ。驚いた。ヴィーグエング名物ですもんね。
　どうやらヒトビトは、この騒ぎに『慣れている』らしい。喜んでいるヒトもいて、エドは判断に迷う。リンを促しながら郵便局を出たときには、ため息が零れた。その脇でリンがくすくす笑っている。
「あのヒトねぇ、見つけたぞって怒鳴って入ってきたのは良かったんだけど、いきなり何かにつまずいて、うわわわわ、ってなったんだよ」
「ああ、それのせいかな。通信がいきなり切れたんだ。話してる途中だったのに、ホンット迷惑」
「それはわかんないけど。一瞬シーンとしたの。アベルさんが、またねって行っちゃうと、真っ直ぐウサギ族のヒト、ぴょこんって起き上がって突っ込んで来るんだもん。ビックリしたよ！」

ウサギ族なのに、なんで猪突猛進……とエドが内心でツッコミを入れる。リンはけらけらと笑った。

郵便局も並ぶメインストリートは、歩行者がひしめいていた。ヒトが流れていく先は、中央広場だ。二人は一度会話を区切って顔を見合わせる。に、と笑いあってその中に混ざりこんだ。

見上げればアパートメントの扉や窓、ベランダに、さまざまで色とりどりのランタンが飾られている。大きさも種類もたくさんあった。広場へ向かうにつれて数が多くなっているようだ。その一つ一つに同じものがない。ぴかぴかに磨かれたランタンは、冷たい空気の中で、キラキラと陽光を反射させた。まるで、宝石のようだ。

やがてたどり着いた広場の中央では、噴水ではなく巨大なランタンが鎮座していた。小さな家ぐらいある、大きく巨大な明かりだ。おそらく夜になればこの広場を中心に柔らかな光が街を包むのだろう。電燈がすべて消され、この数日間はランタンの明かりのみでヒトビトは過ごすのだ。そうエドが説明すれば、リンの目はますます大きくなった。

「夜になったら、もっときれいなのかな」

巨大な明かりに少年たちは魅入っていた。この街にいられるのがたった五時間しかなくて、残念でならない。昼間でこれほど美しいなら、夜はどれだけ幻想的なのだろう。

広場の脇へ寄ったリンに、エドが飲み物を差し出した。祭りなので露店があちらこちらにあった。食べ物やちょっとしたゲーム店もあるが、多いのは工芸品を売る店だった。陶器やグラス細工、銀細工、人形、飾り箱、アクセサリー、掛け時計や、楽器も売っていた。変わったものでは加工前の鉱石が売られていて、エドがなかなか離れない。アンティークな雑貨や家具、食器類でも度々立ち止まるので、リンが苦笑を浮かべる始末だ。そのリンも細工箱や人形を手にとって、家族へのお土産になるかと唸っている。

「でもやっぱ、アレだよね」

「うん、アレがいい」

二人が気に入ったアレとは、ランタンだった。とくに目を見張るのは、工芸の街自慢の工房通りで作られたランタンだ。それぞれ工房名（ブランド名）をかかげ、大きなランタンから小さなランタンまで並べている。どれも見事だったが、小さなランタンは指ぐらいの大きさなのに細工が凝っていて面白かった。

「ちっさくても手が込んでいるんだよね。おもちゃっぽくないのがいいな」

「うんうん、こういうの、みんな喜ぶかも。ええっと、アニエスとローラおばあちゃん、テレサ、ニコラ、エイダの分で五個。ぼくも入れて六個あれば……」

だが、値札を見て二人は仰天した。予想していたより桁が一つ違う。それまで気軽に眺めていたリンが、かちんこちんに固まった。さすが『工芸の街（ヴィーグエング）』だ。露店なのに値段は一級品で、ため息が落ちた。

少年が買うには、あまりに高級過ぎる。一つでさえ大幅に予算オーバーだ。道行くヒトが気軽にバッグや手にぶら下げていたので、もっと安いのかと勘違いしていた。

リンが情けない顔で「仕方ないよね」と笑う。それにカチンときたエドは、店主へ「これください」と申し出た。数を尋ねられ、迷わず「六個」と答える。隣でリンが息を呑んだ。

「お支払いは」

「こっちで」

エドが少し厚めのカードをポケットから差し出した。カードブックと呼ばれるコンピュータである。操作しだいでデンワや≪ザ・ネット≫ができる情報末端だ。店主が「ほう」と感心し、リーダー（読み取り機器）を取り出す。支払いを済ませようとしたエドの腕を、リンがゆすった。

「これ、もしかしてぼくに、なんて言わないよね」

「そうだけど、なに？　欲しいんでしょ」

するとリンが気色ばんでエドをにらみつけた。

「ぼくは、エドに買ってくれなんて言ってないよ」
予期せぬ反発にエドは面食らう。欲しいって言ってたじゃない、とエドが言い返す前に、リンが身を翻してずんずんと歩いていく。冗談じゃない。このヒトゴミではぐれたら、探すのが大変になる。追いかけようとしたエドへ、「待った」がかかった。
「それでこのランタン、買うの、買わないの」

4

買わないよ、と八つ当たり交じりで怒鳴り、エドはリンの背中を追いかけた。どうして僕が怒られなきゃならないんだよ、と内心で毒づきながら懸命に手を伸ばす。幸いにもリンはエドが追いつくのを待っていたようで、すぐに立ち止まった。ぐい、と肩を引っ張ると、手を叩くようにしてはじかれる。

リンが怒っているのは一目瞭然だった。しばし二人は無言で歩く。やがて沈黙に耐えらず、エドから口を割った。

「どうして怒ってるのか、わからないんだけど。欲しかったんじゃないの」

「欲しかったけど。エドに買ってもらってまで欲しいなんて、思ってない」

「どうしてさ。プレゼントだって思ってくれたらいいよ」

リンの怒った眼差しが真っ直ぐにエドを刺した。

「そういう意味じゃないよ。うまく……、言えないけど。エドは友だちだよね。ぼくは何かが欲しくて、エドにそれを買ってもらいたくて一緒にいるんじゃないんだ。……ちがうの？」

すぐに言い返せなかったエドに、リンが失望を宿す。それがハッキリ伝わって、怯んだことをエドは後悔した。喜んでくれると思ったのだ。リンの家族へ何かを贈れたなら、それもいいと思ったのだ。しかし全く逆の形で伝わってしまった。無神経だったのか。施しだと取られてしまったのか。

確かに――傲慢だったかもしれない。

付かず離れずの距離を保ちながら、エドはリンの背中を見つめる。リンの住んでいた『フォーグル』は豊かな星ではない。リンの服装や言動を見ていれば、中心である『ビザノール』の出身ではないと予想できた。家族と連絡を取るのに手紙を使うぐらいだ。

機械に触れず育ったなら、星間列車一つとっても異質だったに違

いない。それがエドには当たり前のことであっても。
……ちがうの？　というリンの問いかけが棘となって抜けない。真摯に向けられた眼差しを、受け止められなかった。それはエドに後ろめたいものがあるからだ。こうしてやったらいい、ああしてやればいい。そんな風に見下したことがないと、断言できない。
こんなとき、大人だったら円滑に関係を結べただろうか。
後悔と苛立ちが心中を占めた。謝罪のタイミングを逃してしまい、今はリンの傍らにいることさえ、苦痛だ。こんなことになったのは、僕が子どもだからか。どう接すれば正解だったのか。
リンから少し離れて歩く自分が情けなくて、エドは唇をかんだ。号外だよ、という掛け声が、祭りの熱気に乗って届く。それさえ煩わしくなったころ……
ジュース買って来るね、と露店へ向かったリンが、「あっ！」と突然往来を横切った。きょろきょろしたと思えば、しゃがんでしまう。何かを拾おうとしたのだ、歩行者でギッシリ埋まっている往来の只中で。ほとんどのヒトは、飾られたランタンや露店に気をとられている。
エドは仰天した。あれじゃ足を引っ掛けてくださいと言わんばかりだ。下手をすればドミノ倒しで、周囲のヒトまで巻き込まれてしまう！　しかし、間に合わない。小柄なリンに足を取られ「号外だよ」と新聞を配っていた男の体が、悲鳴と共に傾いた。
「危ない！」
「――え……？」
ぱらぱらと、紙が舞った。一瞬音が消えたかと思った。男の下敷きになりかけたリンを間一髪で引っ張り戻し、エドは息をついた。今日で何度目のため息だ。
「もう、何やってんの！」
「わあ、ごめんなさい！」
「こんなとこでしゃがむなんて、バカな真似しないでよ！」
「だって、このサングラス、アベルさんのと似てたんだもの！」

強く主張したが、リンはしゅん、と小さくなってサングラスを両手に包む。あんなものを拾うために飛び出したのか、と思うと、エドは頭が痛くなった。だが、うめき声が聞こえたので追及は諦める。
「大丈夫ですか」
ふたりは石畳に正面から転がった男を見下ろした。新聞の箱を小脇に抱えていたため、咄嗟に両手をつけなかったのだ。いててて、と起き上がったのは、頭にバンダナを巻いた小柄なイヌ族の男だった。太いしっぽと垂れ下がった耳がバンダナから見える。いきなりリンが飛び出すとは思いもしなかっただろう。新聞屋にとってはとんだアクシデントである。エドはなぜか違和感に眉をひそめた。横ではリンが同じように、あたふたと宙に舞った紙を拾っている。
「悪いな。えっと、どっちかわからないけど、ケガないか」
「いえ、こちらは何も」
言いながら目配せすると、リンはだいじょうぶだ、とうんうん頷いている。新聞屋はホッとしたようだ。
「そりゃよかった。こっちは肩ケガしてて、バランスうまく取れなくってさあ？」
イヌ族は右肩を押さえながら、周囲の有様に「あちゃあ」と苦笑した。エドが拾った紙を手渡しながら、「すみません、飛び出してしまって」と謝罪する。大したことないよ、と男は笑う。しかし、肩が痛むのか少し顔をしかめていた。リンも、申し訳なさそうにぺこりと頭を下げる。
「あの、ごめんなさい」
「いい、いい。こっちも余所見しながら配ってたからな。ふらふらしてたし気にすんな。ケガがなくて何よりだ」
パタパタと手を振って笑った男は、箱から一枚ずつ回収した新聞をリンとエドに配る。
「拾ってくれた礼にこれやるよ。最新の号外！　今一番のニュースだ」
受け取りながら、エドは違和感に戸惑いを隠せずにいた。何かが

引っかかる。だけど、それが何なのか、ピンと来ない――
　すっきりしないままエドは紙面を覗き込んだ。リンも同じようにして顔をしかめる。
「号外！　号外だよ、さあ、皆さん買ってけよ！」
　男の声が朗々と響きわたった。自信で満たされた声に、エドとリンはびっくりして男を顧みる。まるで舞台に上がった俳優だ。滑舌のよいハッキリした口調は、自然と注目を集めた。男はぽかんとなった少年たちへ片目を瞑り、さらに声を張り上げる。
「怪盗フルムーンの正体や明らかに？　さあさあ早いもん勝ちだよ。怪盗、はじめての失敗だ！　フーリー警部補のお手柄だよ！」
　わっとあちこちからヒトが集まってくる。二階の窓も開かれ、子どもたちが顔を出した。見る間にできたヒトだかりを避けて、リンがエドの上着を軽く引っ張る。
「ねえ、なんて書いてあるの。わっ」
　誰かの腕があたってリンがよろめくのを「気をつけて」と支えてから、エドは合点がいって頷く。
「あ。そっかキミ、読めないんだっけ。ええっとね」
　エドが紙面に落とした目を眇めた。
「……『怪盗一味捕まる。お手柄フーリー警部補。これでフルムーンもお終いか』。何これ」
「怪盗フルムーン？」
「だっさい名前でしょ。聞いたことない？　この怪盗、毎回予告状を出すんだけど。盗むっていうのも汚職の証拠だとか、不正に入手された物品だとか……色々あるわけ。あ。これ、肝心の怪盗は取り逃がしたって書いてある。何やってんだろ」
「有名なの？」
「らしいけど、僕はそれぐらいしか知らない。興味なくて」
　先ほどのギクシャクしたものが消えて、少しエドはホッとする。この雰囲気を壊したくなくて新聞を音読した。先日のガディスバーグ美術館に予告状を突きつけていた怪盗フルムーンが、初めて盗み

に失敗した。それだけでもセンセーショナルだが、今朝方、警察は怪盗一味の捕縛に成功する。大半は変装したヒト族で構成されたメンバーで、怪盗は女性であるとの証言も……

「あ、エド、ねえ、このヒト」

リンが新聞の写真を指して、エドの肩をゆすった。ヒトが読んであげているのにと憤ったエドも、思わず息を呑んだ。

「さっきのヒトだよね。ほら、ウサギ族の」

先ほど郵便省で暴走していた片割れだった。紙面に載っているのは穏やかに微笑む青年だったが、あのときの男に間違いない。ついさっきの殺気立った形相が嘘のような微笑だ。困ったヒトがいれば放っておけない街のお巡りさん、といった雰囲気が画像からにじみ出ている。エドが眉間にしわを寄せた。

「じゃ、追いかけられてたヒトが怪盗フルムーン？　記事にもそんなこと書かれてたけど」

ヒールを鳴らして、するするヒトごみを抜けていった、あの派手な女が？

怪盗をするには目立ちすぎるような……

「アベルさんが怪盗？」

リンが瞬いた。きょとん、としている。

「アベルさん、そんなヒトじゃないと思うよ。このサングラスかけてた人なんだけど、ぼくが迷子じゃないかって心配してくれたんだ。迷子センターか警察へ行きましょうって」

だから騒ぎがあったとき、待ち合わせ場所にいなかったのか。エドが尋ねると、リンは「ごめんね」と再び小さくなった。リン自身も何とか踏ん張ろうと努力はしたらしい。善意の申し出を断りきれず、ずるずると引っ張られたそうだ。結果的にフーリー警部補とやらのお陰で、リンは連れて行かれなかったが。

「知らないヒトについてっちゃイケマセンって言われなかった？」

エドが呆れると、リンはますます縮こまる。まぁ、これ以上責める必要はないか。過ぎたことだし。

「で、そのサングラスをさっき拾ったんだね」
「うん、アベルさんを見たような気がして。そうしたら落ちてたんだ」
もし彼女のだったら困るだろう、とリンが話す。あのヒト族は目が光に弱いらしい。もし彼女が見つからなければ、警察へ届け出ればいいよね、とリンが言う。
「キミは慎重さが足りないよ。危うく怪我するところだったってわかってる？」
サングラスなど捨てておけばいいのに、リンは困ったように笑うばかりだった。エドはそんなところが、理解不能だ。たった数分しゃべっただけの相手を、なぜそうも気遣える。
「じゃ、そのアベルさんってヒト、探しながら回ろ？　四時半過ぎても見つからなかったら、諦めて警察行くってことで」
うん、と頷いたリンが鞄を背負いなおしたとき、「あれ？」と変な顔をした。しきりに跳ねてリュックを触り、また下ろしてしまった。
「どうかしたの」
ごそごそと鞄をあさったリンが、泣きそうな面持ちで、エドを仰いだ。
「これ……、ぼくのじゃない」
「何言ってるの、キミの鞄じゃない」
「ううん、ちがう。だってここに名前が入ってるもの。リン・ユイって。でもないんだ。これ、ぼくのじゃない。それにほら」
鞄の口を開いてリンが何やら荷物を取り出す。そこには何故かお金と、先ほど買い損ねた小さなランタンが六つ。リンの荷物は入っていない。
「じゃあどこに――」
言いかけたエドの視界に、紛失したリュックとそっくりなものが一瞬だけ過ぎった。わかんない、なんで全然違うものになってるの、とつぶやくリンをエドが引っ張って立ち上がらせる。エド？　と現

状を理解していない連れに、ネコ族の少年は怒鳴り返した。
「まだわからないの？　盗まれたんだよ、リュック！　ほらあそこ！」
エドが指差した先で、リュックが角を曲がって消えるところだった。誰かの手につかまれていた。

「バカ、とんま、ドジ！　大バカ！」
きれいに飾られた街並みを見る余裕もなかった。迫るようにせり立つアパートメントの間を、小柄な陰が二つ駆けていく。遠くで祭り拍子が聞こえるのに、ふたりは住宅街を全力疾走だ。
「僕言ったよね。ああ言ったさ、荷物の管理ぐらいちゃんとしろって。一体いつ盗まれたの。リュックサック、どうしてちゃんと背負ってないわけ」
「だって飲み物買いに行こうとしてたんだもの！　それに、ぶつかって慌てて、」
「だってじゃない！　どうするんだよ。乗車券（チケット）や旅費に着替え、全部持ち歩いてるくせに盗まれるなんて、ありえないよこのっバカ！　間抜け、うすのろ！　しっかりしてよね、僕だって面倒見切れないんだから！」
列車が出発する時刻まであと二時間もない。すでに太陽は赤く熟れつつあった。リンが涙ぐむ。どうしよう。荷物がないと列車に乗れない。このままじゃ、一人置き去りにされてしまう。アニエスやみんなとも会えなくなる。頼まれた約束も果たせない。
夕日に引き伸ばされた影を踏んで、二人は走った。しかし、追いつけない。ドロボウのスピードも大したものだ。障害物を難なく乗り越えていく影を、ともすれば見失いそうになる。
しかし何故か走りながら、ドロボウは二人が追いつくのを待っているのでは、と考えた。わざと追跡させているような気がしたのだ。

その証拠に、
「行き止まり？　あいつ、どっち行った」
「エド、あそこ！」
突如現れた壁があって姿を見失っても、誘うように影は通り過ぎた。リンの指差した方向で、伸び上がった影が角を曲がっていく。その手にあるのは、子どもサイズのリュックサックだ。エドが尻尾を揺らして飛び出した。エドの足は、恐らくリンの兄であるニコラより速い。しかしドロボウはさらにその上を行っている。
「捕まえるよ、絶対」
力強い言葉に、リンは大きくうなずいた。

5

角を曲がると、二人の前にいたのは新聞屋ひとりだけだった。号外の箱を持ったまま、あたふたと走っている。あたりを見渡すと、それらしい影がない。荷物を持っていなくても、あの箱に入れてしまえば目立たないはずだ。だとしたら？　ふたりはうなずきあって、新聞屋に飛びかかった。

「この、ドロボウ！」

「荷物返して！」

が、ふたりがつかんだものは紙へ摩り替わった。ばらばらと空から舞い落ちる新聞紙に、黒い影が映る。男はまるで魔法のように姿を消したのだ。目を白黒させる二人の頭上から、笑い声が降ってくる。

「甘いよ。これしきで捕まる俺じゃあない」

男は身軽な動きで壁をけり、器用に四階のベランダへ降り立った。花々の代わりにランタンで飾られたベランダだ。干された洗濯物と逆光で遮られて、顔が見えない。けれどもひょいと肩をすくめ笑ったのがわかる。そして言った。頭に巻いていたバンダナを取り、優雅なまでにお辞儀を一つして。

「ようこそヴィーグエング――工芸と迷宮の街へ！」

「迷宮……？」

「あ！　かばん返して！」

エドが呟き、リンが叫ぶ。にぃっと口を裂いた新聞屋――ドロボウが手にぶらぶらと持っているのは、リンの荷物だ。ベランダの柵に座ってドロボウは足を組んだ。

「ダメダメ、今は返せない。この鞄はしばらく預かっておくよ。そうだね、あと三時間ぐらい？　よく気づいたねぇ、鞄盗ったって。こんなに早く追いつかれるとは思いもしなかった」

「ぼくの鞄、こんなに奇麗じゃないんだ。だってニコラも使ってた

んだもの！」
　ごめんね、とドロボウが頭上でしゃあしゃあと謝る。その行為にエドが切れた。ふざけるな、と声を荒げ、アパートメントの壁を蹴る。その勢いを利用して、向かいの壁も蹴り、一気に壁をのぼっていく。狭い路地裏だからこその芸当だ。ネコ族の身軽さで、四階にいるドロボウへと飛び掛る。
　それをひょいとドロボウは避けた。ベランダの柵の上で、危なげなくバランスを取って、エドを軽く捌く。時に飛び上がり、時に身を翻し、エドは諦めずにチャレンジするが……相手が悪すぎた。リンは、その建物へと飛び込んだ。とりあえず屋上へ出れば、近づける。階段を駆け上がってたどり着いた最上階から身を乗り出すと、まだ二人は荷物の取り合いをしていた。
　ドロボウは息切れして接近するリンに気づくと、さすがに分が悪いと判断したらしい。ひょいひょいと、建物伝いに移動した。屋根の上でも抜群のバランス感覚で立つ彼が、こちらを振り返った。不思議なのは、そこに悪意を感じないことだ。
「待ってください。ぼくの荷物盗ったって、何も入ってないのに！
　欲しいもの、あげますから鞄は！」
「ダメだよ。列車に乗らないでくれって頼んでも、聞けないのと同じさ。だからこうするしかない」
　それじゃあ困るんだ、とドロボウがこぼしてふっと姿が消える。
「待てぇ！」と飛び掛るタイミングを計っていたエドは、あっさり逃げられて舌打ちした。その視界の隅に、駆けていく影が映る。
　リンとエドはすぐさま追跡した。ヴィーグエング名物の工房通りすら見ることなく、年に一度しかないランタン祭りを楽しむことなく、始まったのはタイムリミットつきの鬼ごっこだ。エドじゃないが、まったくもって「ありえない！」
　時間を確認すると、出発まであと一時間しかなかった。まさか、祭り見物に来てこんなことになるなんて。
　今はヒトの少ない裏路地だが、ドロボウが大通りに出ればきっと

見失ってしまう。早く、早く、つかまえなければ。
リンが夢中になって追いかける内に、ふとエドがいなくなった。白い壁のせり立つ路地裏で、あの青い尻尾が見当たらない。表通りの喧騒と違って静かな住宅街は、見上げれば夕暮れ時の空に、洗濯物がつってあった。それを取り込むヒトが、ランタンを入れ替わりにぶら下げていく。リンの視線に気づいて訝しげだ。
視線をそらして向き直れば、工芸の街、自慢の細工を思わせるきれいなガラスが、リンの姿を映した。そこに見慣れた姿がない。
「エド……？」
はふはふと肩で呼吸をしながら、四方八方へ目を向ける。エドが、いない。石畳のどこにもいない。それどころかヒト影もない。みんな表通りに出ているのだ。一つ目の十字路を曲がっても、最前と変わらぬ景色が続いていた。
「え……、え、え？」
きょろきょろと視線を飛ばすが、青い尻尾が見当たらない。ちょっと気取った姿がない。あるのは見慣れぬ街並みのみだ。
「エドおおおおお？」
リンの途方にくれた声が、ヴィーグエングの街に木霊した。
合図したように、ばさばさっと白い鳥が空を飛んでいく。

リンがショックから立ち直ったのは意外と早かった。荷物を取り戻さねばならないからだ。幸か不幸か、ドロボウの姿を見てしまったからには走らなければ。行かなければ！
なんの脈絡なく壁が現れる。路地は突然広くなり、細くなる。トンネルがあり、水路がある。上り坂が来たと思えば、たちまち下り坂に変わる。そんな障害に負けずリンは夢中でドロボウを追いかけた。ドロボウは身軽にひょいひょいと移動する。今度こそ見失っちゃいけない――ただその一心で。

だけど、大人と子どもでは足の速さも体力も違う。ましてや相手はイヌ族だ。
（だめ。見失っちゃう）
もうどれぐらい走っただろう。付かず離れずの間隔をあけて、ドロボウを追いかけている。足取りがおぼつかない。息が切れる。どくどくと跳ね回る心臓も、限界を告げている。ただ追いかけているだけじゃ、絶対に捕まえられない。作戦を立てないと無理だ。
リンが汗を拭って角を曲がった。すると思わぬ壁にぶつかって、悲鳴をあげる。
「わっ！」「おお！？」
上ばかり見て走っていたせいで、誰かがいることに気づけなかったのだ。だが転がる直前に、身体を支えられた。今日はぶつかってばかりだ、と息を切らして上空を見上げれば、ドロボウの姿は見当たらない。涙が思わず出てくる。なんてドジなんだろう。
「え、どこかけがしたかい。ごめんね、不注意だったもんだから」
やさしい言葉が意外で、リンはぶつかった相手を見た。やわらかい眼差しに、きゅっと詰められた襟元にはネクタイ、羽織っているのはトレンチコート、なにより目に付くぴょこんとたった茶色の耳は。
「あ……？」
新聞に載っていた写真。そして郵便省でのあの強烈なできごと――
「フーリー警部？」
フーリーは丸い目をまん丸にした後、照れ笑いをした。あの記事を見たんだね、と控えめに笑いかけられる。かがんでリンの埃を払い、しっかり立たせてくれると、目線を合わせてくれた。だいじょうぶかな、と案じられ、リンが涙をうかべる。
「えっ、どうしたんだい。やっぱりどこかケガでも、」
「ど、ドロボウが、かばんを持っていっちゃったんです。ぼく、ドジで間抜けだから」
言う間に先ほどのできごとが脳裏で再生され、リンはうつむいた。

「オマケにエドとはぐれるし、街の中わからないし……ケガはないですけどよくわからないけどなんか」
なんか。その先が言葉にならず、はらはらと涙を流して訴える子どもに、フーリーは「まいったな」とぼやいた。苦笑を向けられ、頭を撫でる大きな手のひらを感じ、リンは急に自分が不安だったのだと気づいた。追いかけることに夢中になって、そんな余裕すらなかったのだ。
「観光客かな？　お祭りだもんねぇ」
フーリーがゆっくりと口を開く。
「それで荷物を盗られたんだね？　お友だちとはぐれたんだね？　迷子なんだね？」
こくこくとリンがうなずく。
「スリや引ったくりの報告は聞いたけど、子どもにまで手を出す奴がいるなんて」
今持っているバッグは、と尋ねられて、リンは「たぶんドロボウさんの」と自信なくつぶやいた。盗まれたバッグと同じものだと伝えるとフーリーが不思議そうにする。中身を見せると、さらに訝しげになった。
「これはノクターン工房のランタンじゃないか。それが六つ？」
六つも買うと、リンの手持ちのお金がほとんど飛んでしまう額になる。それをぽん、と払おうとしたエドもエドだが、なぜドロボウがこれを鞄に詰めたのかわからない。ましてやリンが欲しがったとなぜ知っているのか。そのことを話すと、フーリーは難しい顔で唸った。
「坊やを知っているヒトなのかもしれないね。この鞄は前もって準備してあったのだと思うし、三時間と言った部分も気にかかる。もしかしてこのランタンはその侘びなのか？　そんなことをするぐらいなら、ちゃんと坊やと話し合えばいいだろうに」
訳がわからない、とフーリーが立ち上がる。リンの不安に気づいたのか、彼は力強く笑いかけてくれた。それが、先ほどのエドやア

ベルと重なる。安心しなさい、と励ましてくれる笑顔と。
「一緒に追いかけよう。こっちへドロボウは消えたんだね？」
リンは大きく首を縦に振ってから、指差した。あの建物の端に垂れ下がった耳とリュックを見たように思う。おっしゃあ！　と気合一発、ウサギ族の男はリンを小脇に抱えた。え、とリンが瞬きする間もなく、勢いよく走り始める。速い。フーリーはジャンプ一回で一気に三階まで飛び上がった。
「この街はね、入り組んでいるし丘の斜面にそって建てられたから、乗り物には頼れないんだ。今の時期、観光客も多いしね。悪目立ちは避けるだろうから、盗人は自分の足で逃げるはずだ」
「もう、逃げちゃったかも……」
「ねぐらに帰ってはいないんじゃないかな。だってドロボウは坊やたちが追ってくるのを待っていたようだし。きっとゲーム感覚なんだ」
フーリーは前方を睨み、危なげない足取りでオレンジの瓦の上を走る。
「僕なら追いつけるよ。足の速さは自慢だ。それに仲間もいる。今日が祭りで助かった、かな？」
必ず捕まえよう。力強くつぶやく彼の顔を見上げれば、リンの心にも希望がわいた。そうだ、まだ諦めちゃいけない。フーリーの走りは軽快で、屋根と屋根の切れ目もジャンプ一発で飛び越えていく。すごい！
走りながら、フーリーは小さなマイクを口元に当てた。ウサギ耳の付け根にセットされた輪から伸びたマイクは、どうやら通信機のようだ。リンの持つバッグに入っていたランタンについて、盗品ではないか確認を取っている。ドロボウのことも、「怪盗の関係者である可能性がある」と同僚を言いくるめてくれた。まさかの展開だ。
リンは涙をぬぐった。ぼくはいつだって運がいい。まだ赤ちゃんのころ、ひとりになったときもアニエスが傍にいてくれた。星間列車ではいつも誰かのお世話になった。エンジャーグルに着いてから

は、エドが友達になってくれた。かばんを盗られても、こうして助けてくれるヒトがいる。ほんとうに、ありがたかった。
鞄は取り戻す。絶対に、諦めない。
「うわあ！？」
オレンジの瓦につまづいて、フーリーが派手にすっころんだ。リンも巻き添えを食って転がる羽目になる。フーリーの下から這い出したリンは、ふと動く影に息を呑んだ。なんとドロボウがそこにいる。こちらを窺っていたのか、リンに気づいて慌てて逃げ出した。
「警部さん、警部さん、あれ！　ドロボウが」
リンが目を回しているフーリーをゆすった。ドロボウが、の一言にがばりと彼は起き上がる。目をらんらんと輝かせ、先ほどよりスピードを上げて、フーリーはドロボウに追いすがった。
「見つけたぞドロボウめ！　大人しくお縄に付けぃ！」

リンが奇妙なウサギ警部補と一緒に路地を暴走しているころ、エドはこれまた奇妙な女とリンを探していた。女はド派手な格好をしていて、カツカツとヒールを鳴らして走る。なんでこんなことになったのだろう、とエドはげんなりしつつリンの名前を呼んだ。
あの後エドもリンがいないことに気づき、慌てて駆け戻ったが手遅れだった。やられた、と思った。あのドロボウが言ったとおりこの街は迷宮だったのだ。毛細血管のような路地が、街のてっぺんにある大きな教会を中心に広がっている。真っ直ぐ進んでいたはずが曲がっていたり、すぐ近くに見える建物が大幅に迂回しないと近づけなかったりするのだ。迂闊だった、とエドが悔やんでもすでに遅い。
彼は冷静に残り時間を確認した。エドの懐中時計はじきに四時になることを教えてくれる。
（五時まであと一時間を切ってる。それまでにあのバカを見つけて、

荷物取り戻して、列車に乗らないと）

間に合うだろうか。そんな不安と頭痛が襲ってきても、リンの捜索は開始せねば。今日は連続で失敗している。通信（デンワ）のこと、ランタンのこと、はぐれたこと。注意していたのにリンは鞄を盗まれた。腑に落ちないのは、何故ドロボウは鞄を「すり替えた」のかという一点だ。三時間、というのも気にかかる。

6

奴は時間を稼ぎたかったのか。二人を列車に乗せるのも嫌がっていたようだった。リンには欲しがっていたランタンの他に、お金も渡している。数えてはいないが、ちょっとした額だった。ふと、エドはドロボウが星間列車に乗りたかったのではないか、と思いついた。狙いは列車の乗車券（チケット）で、リンにランタンを与えたのはその礼か。

しかし、とエドは納得ができない。乗車券（チケット）なら窓口で購えばいいのだ。そこまで考えてピンときた。……買えないのか。ドロボウは正規のルートで購入できないので、リンの乗車券を狙った？

しかし、街から出られないとなると、凶悪な犯罪者を連想してしまう。指名手配を受けるほど、あの盗人は大きな事件を起こしたのか。何千、何億と盗んだ額があるとかの？　そんな大物なら、列車のセキュリティをかいくぐる技術屋とも連携を取ってそうなのに。

纏まらない思考に、エドがため息をつく。何にせよ、盗人の行動に不可解な部分があるのは否めない。

考えながら、エドは通行人を見つけるたび声をかけた。観光地でもヒト族は珍しいので、記憶に残りやすいと踏んだのだ。ましてやリンのようなおっちょこちょいの子どもなら。

そんなエドに声をかけてきたのがこの女、ヒト族のアベルだった。エドと聞き込み相手との会話を聞いていたらしい。かかとを鳴らしながら、彼女は現れた。

「同じヒト族として、あの子が困ってるのを見過ごせないわ。郵便局で会ったのよ。でも、ネコ族の坊やがあの子の言ってたお友だちだったなんて」

意外だったわ、と艶然と笑い、彼女が捜索を買って出てくれたのだ。先刻の郵便局での騒ぎや新聞の内容を覚えていたエドは、露骨に警戒しながらも承諾した。今はとにかく人手が欲しい。

（このヒトが怪盗フルムーンだって？　確定したわけじゃないけど）

エドと同じように誰かを見つければリンの行方を尋ね、四方に目を走らせる彼女。そのようすは手馴れていて、違和感があった。怪盗というより、探偵や警察といったほうがしっくりくるような……

ただの親切心だけでヒトは動かない。何らかの目論見や下心、見返りがあってこそ手を貸すものだ。同族だからと親切に動く奴がいるだろうか。見ず知らずの他人のために。

真っ白な善意ほど、裏がありそうで気持ち悪かった。相手の本音がわからないほど、疑いは深まるものだ。

アベルは郵便省でリンと接触した。迷子センターか警察へ、リンを連れて行こうとしたと聞いた。怪盗が自ら警察へ足を運ぶだろうか。一体、何の魂胆があったのだろう。そして今も、一緒に捜索する意味は。

腹の底に疑惑を隠して、隣のアベルを仰いだ。なにか起こったときの準備だってぬかりない。信頼されて、この旅に出たのだ。子どもじみた失敗はエド自身が許せない。万が一のときは、腹をくくる。

ふと、楽しげな声が風に乗って運ばれてきた。本来ならもっとランタン祭りを満喫していただろうに……とエドがため息をついたとき、横手から人影が飛び出した。勢いよく突き飛ばされ、エドがアベルもろとも倒れこむ。ききっと止まった影が、律儀にもエドへ手を差し出した。

「すいません！　急いでいたもので、お怪我などはありません、か……？」

妙な間が落ちた。

「あああ！！」

エドとアベル、そして飛び出してきた影と三人、指を突き出して叫ぶ。あのドロボウだったのだ。見覚えのあるバンダナに垂れた耳、顔、なによりリンの鞄がある。間違いない。

いち早く行動したのはエドだった。「そのバッグを、」と起き上がって手を伸ばす。そこへ「待ぁてえええええ」と声が響いた。マイクで怒鳴ったような大声は、聞き覚えがあった。しかも徐々に近

づいてくる。ドロボウが舌打ちし、身を翻した。
「待っ――」
「危ない坊や！」
追いかけようとしたエドを、アベルが抱きかかえるようにして引き倒した。ドロボウはせり立った壁を身軽に乗り越えていく。エドの押さえ込まれた肩に、ぐっと力がこもった。
「何するんですか！　せっかく捕まえられそうだったの、に……」
身をひねったエドの非難は、尻すぼみに消えた。すごい勢いで走る何かが、眼前を通過したのだ。トレンチコート、ぴょこんと立った耳、あの暴走。同じようなのをさっきも見た。エドの頬が引きつる。ドロボウの追跡者は見紛うはずもない、あのフーリー警部補だ。怪盗を追ってるはずの彼がなぜ――
「って、ちょっ、えっ？」
リンが、フーリーの小脇に抱えられていたのを思い出した。リンはあれと手を組んだのか。たしかに、盗人を捕まえるには最適だ。最適だが、何か間違ってる気がするのは気のせい？
しかし、引き止めようにも、彼らの姿は跡形もない。おそらく路地に入ったのだ。あのようすなら、エドに気づけたかも怪しい。
「ほら、ぼさっとしないで」
「わっ、押さなくても」
自分で立てます。そう言おうとしたエドは、身をよじったときの妙な感触に眉根を寄せた。手のひらを見つめ「今何か……」、動くはずのないものが、ずるりと滑った。アベルが小さく悪態をついて、乱れた胸元を整える。
「早く、追いましょう。見失ってしまうわ」
何事もなかったようにアベルに手を引かれ、エドは走り出す。引きずられる形になりながら、
「あの、あなたはさっきのヒトに追いかけられてませんでした？」
怪盗フルムーンだと疑われているなら、接触するのはまずいはずだ。このまま追っても平気なのか。すると『彼女』は薄っすらと微

笑んだ。
「私の心配をしてくれてるの？　多分問題はないわ。向こうの勘違いだもの」
急ぎましょう。そう言うアベルは、エトムントのほうをさっきから見ない。やっぱりさっきのは勘違いじゃないのか。斜め前を走る『彼女』へ、エドは恐る恐る尋ねた。
「あの、あなたって……そういう趣味のヒト？」
アベルは肩を震わせて立ち止まった。ざっと髪をかきあげ、軽くエドを睨む。
「べ、別に僕は、あなたがそうであっても、何も言いませんけど！　ただちょっとビックリしたと言うか、驚いただけで……」
しどろもどろの言い訳も、アベルには通じないのか。その表情は先ほどまでとは何かが違う。ネコ族の少年は「やっぱり聞いちゃいけなかったか」とビクついた。ため息を零すアベルの指から、髪がぱらりと落ちた。猫のようなしなやかさから、刹那、狼のような獰猛さが覗いた。
「まったく、人聞きの悪いことは言わないで欲しいな。いいから坊やは黙ってついてくればいい。こっちだ」
がしっとアベルはエドを捕まえ、一気に駆け出す。
「え、わ！？　ちょっ」
いきなり何をするんですか、と出かかったエドの抗議は消えた。アベルの目は仇敵を見たかのように燃えていたのだ。エドを連れて、迷うことなく路地を越えていく。まるで進むべき道がみえているように。
「本当、何の因果かなァ？　あのとき邪魔さえ入らなければ、こんなことにはならなかったけど、この状況！　急ごう、友だちを助けたいんだろう。こうなってしまったら、内密に捜査なんて進められない。彼らを止めるんだ！」
その科白に眉をひそめる間もなく、エドはアベルの後を追いかけた。ピンヒールなのに、なかなかのスピードで駆けていく後姿を見

失わないように。
　そういえば、同じような違和を、もう一つ自分は感じたのだと思い出しながら。

「怪盗フルムーンというのはね、あだ名なんだよ」
　唐突に出てきたその話題に、リンはフーリーを仰いだ。
「奴らは宇宙警察に指名手配中の『アパリション』のメンバーだと噂されているんだ。エルザ・スコーピオを筆頭にした、ね。聞いたことがあるんじゃないかな」
　ふるふるとリンが首を振れば、そうか、とフーリーは苦笑した。すでに三十分は追いかけっこをしているが、ドロボウは捕まえられなかった。巧みに逃げられ、隠れられてしまう。そのたび足を止めて捜しまわるが、見つけたら見つけたで追いかけっこの再開だ。
　五時まであとどれぐらいあるだろう、とリンに不安が過ぎったころ、フーリーが話し出したのだ。疲れを紛らわすためか、リンを気遣ってくれているのか。
「そのヒトたちは、あちこちでドロボウをしていたのですか？」
　うん、とフーリーがうなずく。大通りを挟んだ先へもウサギ族のジャンプ力と俊敏さで、どんどん乗り越えていく。さしもの迷宮と称されるヴィーグエングも、フーリーのようにぴょんぴょん飛び越えられれば、その威力は半減だ。ドロボウは何度か見失ったが、そのたびフーリーの仲間から報せが入った。フーリーが言ったように、今日が祭りなのは幸いだ。街のあちこちに増員された警官が散らばっている。
　その中を逃げ切るドロボウは只者ではない。これまでに挟み撃ちもチャレンジしたが、するりと魔法のようにかわされてしまった。だからだろうか、フーリーが怪盗フルムーンを思い出したのは。
「最初はね、エンジャーグルだったんだ。あの商業惑星で、奴らは

次々に汚職や不正を暴いていった。その証拠も添えてね。大暴れしていたけど、ぱたりとあるときを境に静まった。そしてその半年後、うちで活動を再開したんだ」

ヴィーグエングに奴らが来るとは予想もしなかった、とフーリーは苦笑した。ましてや追いかけっこをするなどと。当事は寝耳に水状態で、上から下まで大騒ぎだったらしい。特に『上』は大慌てだった、とフーリーが苦笑する。

「怪盗たちはヒト族の世界で活動をしていた、なんて噂がある。そのせいかエルザをはじめとするメンバーは、ヒト族ではないかと言われているね。ヒト族は特徴が少ないから、他種族へ変装するのも我々に比べて容易だし。それに昨晩、偶然奴の姿を捉えることができたんだ。あれは、ヒト族だった」

リンは身を固くした。同じヒト族がそんなことをしているなんて、信じられなかった。リンを気遣ってくれたアベルの姿が、眼裏にちらつく。

見失った姿を求めて、よ、とフーリーが屋根から屋根へジャンプした。

「リンくんを責めているわけじゃないよ。我々に個性があるように、ヒト族だって様々なヒトがいることを僕らも知っている。同族が疑われるのは悲しいかもしれないけど」

フーリーのフォローを聞いても、リンはしゅんと萎れたままだ。

「怪盗たちは、正義を気取りたいんだろうね。病院や擁護院へ多額の寄付が、先だって匿名で送られたよ。誰もが怪盗だと疑わなかった。予告状と完璧な証拠と、マジックじみたパフォーマンス。おまけに悪を憎む者ときた。たしかに物語のヒーローみたいだ」

でも犯罪は犯罪なんだ、とフーリーが断じた。誰かを救うためだなんて大義名分を掲げても、ルールを無視したら、守るべきヒトビトが守れなくなってしまう、と。正々堂々と、汚職を糾弾できないのは悔しいが、やり方を彼らは間違った。法が崩れたら、弱者は強者に食われるだけだ。そんなことになったら戦時中より酷くなって

しまう。
鼻息荒く力説し、リンを抱えていない方の腕でフーリーは拳を作った。
「警部さんと怪盗さんが、手を組めたらいいのに」
怪盗を名乗っていても、悪い人たちには思えない。エルザの一味は悪を暴いているのだ。でも、フーリーはかぶりを振った。今の彼らじゃ無理だろうね、と苦い笑みだ。
「しかし、ドロボウの逃げっぷりを見ていると、怪盗を思い出して仕方がないよ。怪盗もあれぐらいひょいひょい逃げるんだ。まるでこの街を知り尽くしているようにね。誰かの手助けでもあるかな？」
「だけど新聞で、警部さんお手柄だって、」
フーリーが顔をしかめた。
「肝心の本人を取り逃がしたのにお手柄だなんて。お手柄と言うなら、匿名のタレコミだ。まさに一網打尽だったよ」
大暴れしている「怪盗一味」は、莫大な賞金がかけられている。それもそのはずだ、怪盗たちが盗み出すのは名誉なのだから。権力者たちが血眼になって探しているのだ。
それを聞いて、え、とリンが息を呑んだ。もたらされた情報は的確で、ろくな抵抗もできず、怪盗の仲間たちはいっせいに逮捕されたのだ。だからこその『号外』だ。しかしその中に怪盗と噂される「エルザ・スコーピオ」はいなかったと言う。
「エルザ、イコール、怪盗説は前々から囁かれていたことだった。あのタレコミもそんなことを示唆していたと聞くよ」
だが、匿名って部分が腑に落ちない、とフーリーがぶつぶつぼやく。
「警部さんは怪盗を見たのでしょう？　アベルさんが……、そうだったのですか？」
言いにくそうにリンが尋ねると、フーリーはきょとんとした。そして「あ、昼間のアレだね」とうなずく。
「変装した姿かもしれないが、昨晩、確かに見たよ。だが奴は自分

は怪盗ではないと言っていた。それも引っかかるが、昼間の女性がその不審人物によく似ていたんだよ。怪盗じゃないにしても、何らかの手がかりを持っている可能性があるから」

リンは生返事を返す。あのアベルが怪盗だなんて思えなかった。釈然としない。だってアベルはリンに対してとても親切だったのだ。迷子なの、と聞いてきたアベルは、純粋にリンを心配してくれていた……そうリンには映った。だからこそ申し出を強く断ることができなかったのだ。

彼女が怪盗なら、あの善意は、嘘だったのだろうか。

いや、怪盗だからこその善意になるのか……。

そんなヒトがなぜ追われなければならないのか。

7

「まだ確定したわけじゃないけどね」
慰めるようにフーリーが言ってくれたのは、リンが落ち込んだからか。
「あ、ちなみに僕は警部補なんだ。まだ警部じゃなくて」
肩をすくめるフーリーの顔が、つと険しくなった。長い耳がぴょこんと立つ。本当か、と鋭く通信機に聞き返していた。フーリーの仲間（警察）から連絡が回ってきたのだ。ひとしきり喋ったフーリーは、リンに向けて笑顔をくれた。
「リンくん、奴は教会付近だ！　今度こそ捕まえるよ！」

教会とは、ヴィーグエングの丘の天辺に立てられた、古びた建物のことだった。その手前でイヌ族のドロボウは目撃されたらしい。リンたちがその姿を発見したとき、奴はリンの荷物をひっくり返していた。
何かを探しているのか。ドロボウが欲しがるようなものはなにがあったか。お金、ではない。もしそうなら、リンにランタンを与えたりしない。星間列車の乗車券？　そういえば、ドロボウは「列車に乗らないで欲しい」と言っていた。……ドロボウが、列車に乗りたいのだろうか。
リンの着替え一式はドロボウにとって価値はないだろう。他に何か価値のあるものはあったか。頭を巡らせると……最後に残されたのは『女王さまから預かった手紙』しかなかった。
「落ち着いて。まだ奴はこちらに気づいていない。仲間が集まるのを待つんだ。いいね」
ドロボウを包囲して捕まえる作戦だ。先ほど数人による挟み撃ち

に失敗しているので、フーリーのほうも慎重なのだ。
　しかし、リンは待てなかった。だって、あそこには『手紙』がある。リンに託された手紙が！　フーリーが仲間と連絡を取り合っている隙に、リンはそろりそろりとドロボウへ近づいた。案の定奴は屋根の上にいて、近づくのもおっかない。フーリーは近くの建物に身を潜めたが、そこからリンが近づくには一度降りてぐるりと建物を回り、屋根まで上らなければならなかった。フーリーならばジャンプ一回なのに。
　屋根へ出ると、強風と共に身体が飛んでいかないか、不安になった。マフラーを改めて巻きなおし、リンはきゅっと唇を結ぶ。ばくばくと心臓が波打った。少しずつ近づくと、ドロボウは悪態をついて、鞄の中身を確認していた。さすがに息を切らしている。逃げては隠れ、隠れては逃げを繰り返していたのだから当然だ。
　しかし鬼ごっこも、これで終わりになる。もうドロボウの姿はすぐそこだ――
　こくん、とリンが息を呑んだとき、足が何かに取られた。がくん、と身体が傾ぐ。「わ！？」という悲鳴にドロボウがこちらを振り向いた。
「やめるんだ、リン君！」
　後方からフーリーの警告がする。だが、リンは意を決してドロボウに飛び掛った。ここで躊躇ったらまた逃してしまう。列車にも間に合わなくなる。チャンスはこれっきりだ。リンの思い切った行動にドロボウは硬直した。逃げるか受け止めるか迷ったのだ。ドロボウが避ければ、リンは屋根から転がり落ちたかもしれない。
　舌打ちがした。リンの身体はドロボウとぶつかって屋根の上を滑った。意外にドロボウの体重は軽く、バランスを崩すには十分だったのだ。
「なんてことをするんだ。受け止めなかったらどうなったことか、」
　盗人が文句を並べる間に、何とかリュックへリンの手が届いた。抱きかかえるようにして荷物を手繰り寄せ、

「返してください、コレがないと困るんです！　うちに帰れないし、この星に一人ぼっちになっちゃう！　返してください、こっちのランタンはいらないから！」
リンが決死の思いで叫ぶと、ドロボウも怒鳴り返してきた。
「駄目だ。放せ、しつこいぞ」
ドロボウも躍起になってバッグを引っ張るが、リンの身体も一緒くただ。荷物を振り回すとリンも振り回された。
「どうしてぼくのリュックなの。何も、入ってないのに！」
リンも必死だ。とにかく離されまいと食らいつく。すると、そのリンの耳元で、ぼそりと女の声がした。「入ってるよ、大切なものがね」と。それまでの男の声ではなく、少し低めの女の声に、リンがぎょっとして凍りつく。その隙を狙ってドロボウがリンを羽交い絞めにした。
「この子どもがどうなってもいいのか！？　止まれ！」
威嚇の声は、男に戻っていた。え、え？　とリンは突然の出来事に目を白黒させた。単にドロボウが女の声色を真似たのか。それにしては、ぞくりと肌があわ立った。首をひねってドロボウを見上げると、イヌ族は死角から手を伸ばしたフーリーを睨みつけている。
ドロボウはリンと荷物ごとじりじりと屋根の端に立った。ギリギリの場所からさらに、リンの身体を左腕一本で屋根際へと追いやる。このままわずかに背を押すと、もしくは男がリンを手放すとどうなるか。
「……っ！？」
フーリーが動きを止めたので、ドロボウはにやりと笑う。は、は、と肩で呼吸をしているドロボウの顔色は、悪い。右肩をかばいながらリンをさらに端へと追いやる。
鞄を抱きしめ、リンはがくがくと体を震わせた。足元を見れば、めまいのするほどの高さだ。石畳が、小さく見える。捕まれた襟首と背中を支えるドロボウの、なんと心細いことか。エドとはぐれたことも怖かった。鞄を奪われたときの衝撃もすごかった。だがそん

なものは今の自分に比べたら――このまま落とされたらリンの人生、潰れたトマトと同じになってしまう。
　そのとき、背中越しに囁き声が伝わってきた。
「じっとしていなさい。悪いようにはしないから。本当ならあの列車にも乗って欲しくなかったけど、欲を出しちゃだめね。さあ、アレを渡しなさい。坊やに託されたアレを」
　え……？　とリンが身をよじろうとすると、頭部を押さえ付けられた。振り返ることは許されない。だが聞こえた囁きは、女性の声だった。頭が混乱しそうだ。このドロボウは、女性なのだろうか。体格はアニエスより小柄だが、小さい男のヒトだっているし――
「下がれ。この子どもの命が惜しければ下がるんだ」
　フーリーへは男の声でドロボウは対応している。
「卑怯な。少年を放せ！」
　怒鳴るフーリーへ、据わった目のドロボウがにやりと笑った。さらにリンを押し出したのだ。ひっと上ずった声をリンが出した。
「卑怯もくそもあるか。ほら、銃をこっちによこせ。市街でぶっ放すってのか？　え？　祭りをぶち壊す気かよ！」
　鬼気迫るドロボウの剣幕にフーリーは逡巡し、懐から銃を足元に置き、転がした。それを、リンをつれたドロボウがじりじりと寄って、蹴落とす。かん、かん、と音を立てて落下した。何だ、という声と悲鳴が下から聞こえてくる。眼下を歩いていた住民に騒ぎをかぎつけられたのだ。
「上着も脱げ。早くしろ！」
　言う間に今度はじりじりとドロボウが後ろへ下がった。逃げるつもりだ。フーリーは悔しげながらも従う。
　極度に追い詰められた者ほど何をやらかすかわからない。リンがこの三階の高さを落ちたらひとたまりもない。狭い裏通りに野次馬が集まってきて、何かを口々に叫んでいた。ドロボウが口を裂いた。これで下手なことはできまい、という笑みだった。
　するとぐるぐる動いていたフーリーの視線が、ある一点で止まっ

た。ぐあっと目を見開き何かを叫ぼうとして、必死に自制している。ドロボウが思わずその視線を追いかけたときだった。
「ちょっと待って！　あいつに当たったらどうする――」
聞き覚えのある声。そして、轟音。ドロボウの右太ももを何かが掠めた。
「きゃあ！」
ドロボウの身体が揺れたと同時に、リンも投げ出された。フーリーが、気色ばんで屋根を疾走する。ドロボウが慌てふためき手を伸ばす。空中でリンは腕を振り回した。落ちる。アニエス、ローラおばあちゃん、テッサ、ニコラ……エイダ！　ごめんなさい！
だが、がしっと何かがリンの腰を掴んで止めてくれた。屋根から半分以上乗り出した少年の身体を支えたのは、二つの腕だ。フーリーとドロボウの。その行動に驚いたのはフーリーだった。
「なぜ」
助けたんだ、というフーリーの言葉は男とも女ともつかない声にかき消された。
「捕えろ！」
フーリーは迫る足音を大きな耳で拾い、力いっぱいリンをもぎ取った。人質を失ったドロボウが醜く顔をゆがめる。そしてその懐に手を突っ込んだとき、
「そこまでだ！　エルザ・スコーピオ！」
凛とした声は、場の空気を切り裂いて響いた。

かつっとヒールを鳴らし、髪の毛を風に乗せて女が近づいてくる。タイトスカートからむき出しの足が、慎重に歩を進めた。手の中にある銃を、女――アベルはまっすぐドロボウにポイントしている。
その傍らに立ったエドが、仏頂面をしていた。先ほど聞こえた抗議の声は、エドのものだったのだ。ちらり、とエドがアベルを仰ぐ。

アベルは緊張した面持ちのまま、小さくあごを引いた。エドがリンの元へ走ると、リンはぺったり尻餅ついて、かたかた、と身体を震わせていた。フーリーから庇うように抱き寄せて、
「大丈夫、ケガはない？」
歯の根のかみ合わぬリンを、エドが覗き込んだ。リンは固まった顔をなんとか笑顔にしようとして、失敗する。落とされかけたのに放さなかったバッグを抱きしめ、何度も何度もうなずいた。安堵感に全身の力が抜けそうだ。
そこへ本日何度目かの咆哮がとどろいた。
「貴様あ！　ここで会ったが百年目、大人しくお縄につけえ！」
フーリーが吠えてアベルに迫る。素手でつかみかかろうと飛び掛ったのだ。リンが小さく悲鳴をあげ、目を見開いた。エドはあちゃあ、と言うように片手を顔面に当てた。アベルは冷静にフーリーの腕を軽くいなし、捻り上げる。そして、激昂した。
「このっ痴れ者が！　あいつをちゃんと見ろ！　それでも警察かっ！」
麗しい女の顔から出る気迫がすさまじい。ギリギリとフーリーの腕を捻り上げながら、女は首に巻いてあるチョーカーをむしり取った。それは風に乗って飛ばされていく。
「エルザ・スコーピオ。ようやっと追い詰めたぞ」
アベルの口から出てきた声は完全に男のものだった。
どん、とフーリーを突き飛ばし、逃げようとした泥棒へアベルは歩いていく。銃を構えた沈着な顔には、うっすらと笑みを浮かんでいた。
「アベルさんって……」
リンが尋ねると、ネコ族の少年は目を泳がせた。その引きつった顔は「なにも訊くな」と語っている。ぺたんと座ったままことの成り行きを見守るリンを、エドが背中に庇った。吐く息が白くなって流れる。ピンと張り詰めた空気は、対峙するドロボウとアベルが放っていた。夕焼けの赤い光が、屋根の上に集まった彼らを照らし出

す。
「エルザ・スコーピオ……？」
フーリーが脱臼されかかった腕を押さえてつぶやいた。ドロボウの粗野な顔に、広い肩幅、声は男のものだ。確かに身長は少々低いが、女には到底見えない。なによりエルザはヒト族ではなかったか。牙などないし、しっぽも生えていないはずだ。
だが怪盗だと言われてみれば、あの逃げっぷりにも納得がいった。リンへ耳打ちしたあの女の声も、ドロボウが「エルザ・スコーピオ」という女性なら考えられる。
ドロボウへ刺すような視線を向けたアベルが、男にしかできない太い笑みを作った。
「子どもを人質にとるとは落ちたもんだ。仲間を奪われ、義賊（アバリション）を名乗るのも飽いたか。っは、惨めだな」
ドロボウは足を押さえてアベルを仰ぐと、唇を歪ませた。ドロボウの撃たれた箇所から血がうっすらと滲み出す。それを押さえながら、
「その顔、アベル・ヨークか……！？」
アベルが笑みのまま自らの頭に手を当てると、髪をむしりとった。いや、脱ぎ捨てた。フーリーとリンは目をむく。背中まであった艶やかな黒髪が、かつら？
偽の黒髪の下から現れたのは、眩いほどの金髪だ。顔を触れればぺりっと何かがめくれあがる。右目の下を鼻梁まで走る傷があらわになった。どよめきが空間を支配する。傷を隠す特殊メイクだったのか。
刈り込まれた金髪に傷、濃い化粧を落とせばアベルは男に見えた。中性的な容姿だが、雰囲気が柔らかさを裏切っている。タイトスカートにハイヒール姿だったけど。
その場の視線を一身に集めた彼は、にやりと笑った。
「変装はあんた直伝だ。多少無理があったけど、見事に化けたもんだろ。昨日美術館で俺が撃った肩の傷は、痛むかい、センセイ」

「及第点をあげていいわ。思い切ったことをしたものねぇ……。あれはお前だったの。美術館のセキュリティが変わっていたのは。無能な地元警察にしちゃよくやったもんだと思っていたけど」
背後で「むの……っ！？」とフーリーが怒鳴りかけたのを、リンとエドが押さえつける。リンは戸惑いながらも、ドロボウの口調が変化したことに気づいた。では、やはり追いかけていたドロボウが怪盗フルムーンなのか。アベルが実は男だったように？
「ちょっと手を加えさせてもらっただけさ。おかげであんたと勘違いされた。厄介ごとを押し付けられて勘弁して欲しいね。ついでに言うなら、お仲間を逮捕したのは地元の警察で、俺たちじゃない。さあ、観念してもらおうか」

8

「そのよう……だね！」
伸び上がった足がアベルの側頭部を狙った。腕でガードしたアベルが反撃するより早く、怪盗はさらに身をひねる。防がれた足を軸に、ぐるんと身体が回転した。勢いに乗った二連続の蹴りが決まる。アベルが体勢を整えるより早く、沈んだ怪盗が伸び上がりざまに掌底であごを突き上げた。一瞬の攻防は、エルザの勝利だ。鋭い蹴りが、脳を揺さぶられたアベルの腹を突く。
「けが人だからって油断するなと教えなかったかしらね。生かして捕らえようとするからよ。その迷いが命取りになる」
屋根の反対側に落ちたアベルを、静かに見送ってエルザが吐き捨てる。
「っ、アベルさん！」
リンの絹を裂いたような声が、暮れなずむ街に反響した。

エドは目を離せずにいた。エルザが苦痛に歯を食いしばって、こちらを振り返ったのだ。懐に手を突っ込んだ怪盗が取り出したのは、銃だった。エドが舌打ちした。警察たちは肝心のときに役立ってない！
怪盗は油断なく周囲へ目を這わせ、フーリーへと銃の狙いを定めた。そのままこちらへ近づいてくる。
やばい、と何かが頭の中で警鐘を発した。ヤバイ、ヤバイ、ヤバイ、ヤバイ、ヤバイ、と強烈な警告を身の内から感じているのに、逃げられない。怪盗へ注意を向けながら、エドはリンの腕をぎゅっとつかんだ。落ちたアベルの元へ駆け寄ろうとするリンを、必死に留めた。

「放してエド！　アベルさんが、落ちちゃ……っ、アベルさんが！」
「わかってるよ！　でも行っちゃダメだ！」
ぎり、と奥歯をかみ締め、エドはリンを背中に庇った。エドだってできることなら助けに行きたい。まっ逆さまに落ちたのを見たのだ。安否が気になるのは当然だ。しかし、銃を持って立ちふさがるエルザを、無視できない。
そのとき、二度目の銃声がした。次に呻いたのはフーリーだ。膝を屈し、腕を押さえてフーリーがエルザを睨んでいる。フーリーのすぐ隣の瓦が割れていた。エルザの持つあの銃は、おもちゃではないらしい。
リンとエドに注意が向いた怪盗をフーリーは捕らえようとしたのだろう、しかし、イヌ族に変装した怪盗は、悠然と冷たい笑みを返す。この場の支配者が決まった瞬間だった。どくん、とエドの心臓が高鳴った。
「動かないで」
その銃口が、子どもたち二人に向けられる。リンがひ、と喉を引きつらせた。恐慌状態に陥ったのか、荒い呼吸がエドにまで伝わってくる。今、このリンを渡してはいけない。しかし、守りきれる自信なんてエドにはなかった。負傷したフーリーや他の警察も、動くのを躊躇っている。
「やめろ、子どもたちに手を出すな！」
だがエルザはフーリーを威嚇しながら、ゆっくり二人へ近づく。
エドは乾いた唇をなめて、少しずつにじり下がった。恐怖で思考が停止しているのか、リンは背後で「アベルさん、フーリーさん、いやだ、そんな、いやだ、怖い……いやだ」などとぶつぶつ呟くばかりだ。しっかりしろ！　とエドは頬でも張ってやりたかった。しかし、ヘビに睨まれたカエルと同じで、エルザからエドも目をはがせない。ゆっくりと、足を取られない程度に下がるしかできない。
「いい？　つかまっても抵抗しないでね。刺激しちゃ駄目だ。何もしないで。叫ぶのもナシ」

小声で話しかけると、リンはカタカタと震えていた。否、震えているのはリンの腕をつかんだエドのほうか。恐怖を飲み込んでエドはエリザを見据えた。リンが下手な真似をしないよう、銃撃からかばうように左腕を広げる。飛び出さないで。ゆっくりと下がって。落ち着いて。その意図がリンへ伝わるように。

「エ、エドは、どう、するの」

「やれることをする。――諦めないで」

エドからは見えなかったが、リンの表情からすぅっと怯えが消えた。唇を引き結んでいる。恐ろしいことには変わりないだろうが、戦う決意がついたのか。放さずにいた鞄をぎゅっと握り締めて、エルザを強く見つめていた。

そうとは知らず、エドは突破口を探して視線をさまよわせ、息を詰めた。屋根の端に誰かがしがみついている。アベルだ。落ちていない。助かっていた！　屋根へ登ろうとする腕が見えた。今、怪盗に気づかれたら、彼は今度こそ落とされる。

エドは慎重にコートのポケットに触れた。上からそっと、エルザに気取られないように。

恐らく、チャンスは一度きりだ。そのタイミングを誤ってはならない。

撃たれた足を引きずったエルザ・スコーピオの手が、二人へと迫った。視界を怪盗にふさがれる。見上げた彼女が大きく映った。これは逆光のせいでそう感じただけなのか。大人という存在は、ここまで恐ろしかったか。

「騒がないでね。悪いけど、最後まで付き合ってもらうしかないわ」

イヌ族の男の姿で、女の声がするのは不気味さに拍車をかけた。エドは果敢にもエルザを睨みつけ、立ちふさがる。

「無駄だね、怪盗。警察に包囲されてるって気づかないの」

ドロボウがぴくりと眉を動かすのを見て、エドは畳み掛ける。

「それに星間列車の切符は、あんたは使えないんだ。あんたは単純なことを見逃して、る……！？」

エルザがエドの胸倉をつかんで引き寄せた。手弱女ではない鍛えられたエルザの腕が、エドを締め上げる。エド、とリンが叫んだ。
「用があるのはそんなものじゃないのよ。手負いの私に仕掛けられない能無しにもね」
至近距離ですごまれる。だが、エドは視線をそらさなかった。ゴールドグリーンの瞳が、怒りに燃える。この程度で屈服させられると思うな。そんな意思が伝わったのか、ふと怪盗が笑った気がした。
「子どもに乱暴するな！　正義を気取っていたんじゃなかったのか！」
フーリーの怒りに、エルザの身体がわずかに震えた。その瞬間を見計らって、リンがドロボウに飛びつく。やめろ、とエドが止めるのも間に合わなかった。パン、という音と同時に、屋根瓦が弾けた。リンの身体が硬直する。弾丸は、リンのすぐ傍を通過したのだ。
「私は、悪だと言われても構わないのよ。そうじゃなければ今ここに、立っていない。――いいこと、大人しくしていなさい」
じりじりと、包囲網から抜け出すべく移動するエルザは、油断なく辺りに目を走らせていた。銃を持たない手でリンの首根っこをつかみ、後退していく。そのエルザの腕で首を締められながら、エドがあえいだ。このままだと、エドとリン、どちらかしかエルザは連れて行かない。人質は一人で十分だ。
どうしたらいい。どうしたら……エルザの意識を自分へ傾けさせるには。
考えを巡らせ、エドは口を開いた。失敗は許されない。
「あんたに……何ができるって言うの。子どもを人質にとらなきゃ動けないあんたが、何を変えられるの。変装も下手な怪盗風情が、何をするって言うんだよ。義賊？　笑わせる。周り全部あざけって、独りよがりな偽善ばら撒いているだけじゃないか！」
小さな声だったはずが、最後には怒鳴り声になっていた。エドが挑戦的に口角を押し上げる。もう少し――もう少し、エルザの注意を、僕に。エルザの背後で、アベルがこちらへ向かってくるの。エ

ドをにらむ怪盗は、まだ気づいていない。
「坊やと善悪を問うつもりはないの。私の信じた道がこれだというだけ」
「なら、今あんたがしていることが信じる道なんだ？　子どもを追い詰め、子どもを泣かせて！　なにが正義だ。なにが弱者の味方だ。あんたはただの犯罪者だ！」
息をのむその一瞬、リンが怪盗の足にかばんを力いっぱいぶつけた。エドがポケットに忍ばせた何かを、バランスを崩したエルザのわき腹に押し当てる。それのスイッチを思い切り押した。直後女の悲鳴が響き、子ども二人は弾き飛ばされる。その隙をついたアベルが膝蹴りでエルザをなぎ倒した。
「フーリー警部補ッ」
「言われなくとも！」
フーリーが傾いだ二人を屋根際で捕まえた。後一歩遅ければ、三階の高さから地上にまっさかさまだった。リンが気絶しているのをフーリーは確認して、安堵の息を吐き出す。エドはと言うと、自分のしたことに驚いたのか目を見開いたまま固まっていた。
「よくやったよ少年……。でもなァ、無茶はしちゃいかんよ。それは、スタンガンかい？　どこでそんなものを」
フーリーが息を吐き出して、呆れた眼差しをエドに向けた。エドの手の中にあるのは、十万ボルトのスタンガンだ。護衛用にと持たされたものが、まさか役に立つとは。エドは荒い呼吸を繰り返しながら、歯噛みした。
無茶をしてはいけないと言われても、この方法しか思い浮かばなかった。そうじゃなければ、どちらかがエルザに攫われていただろう。だが、その為に自分がしたことは。
ヒトを傷つける行為を、今更ながら嫌悪した。それまで大切にしてきた何かが、涙となってぽろぽろと崩れていく。僕は、ヒトを傷つけられる。目的のために躊躇なく、実行できる。
は、っはは、と引きつった笑いと共に涙が落ちた。手の中にある

小さな武器は、これほど恐ろしいものだったのか。結果など想像できたのに、エルザの悲鳴が恐ろしかった。耳に残るあの叫びが、消えない。暴力を、自分が行ったという事実が。
もしかしたら、これが銃でも迷わずトリガーを引けたかもしれない、と。
そっと肩に誰かの手が触れた。
「怖かったね。よく頑張ったよ」
エドの涙を隠すように、フーリーが頭をなでる。ねぎらいは、『子ども』へ向けたものだった。フーリーはエドを『守るべき存在』だと認識しているのだ。涙をぬぐおうとすると、がたがた震えている自分に気づいて、余計に情けなかった。
(僕はこれほどまでに子どもなんだ)
その事実が胸をえぐる。だが、同時にホッとしていた。今は泣いていたい。『子ども』で、ありたい。
フーリーが苦笑をして二人を抱きしめた。エドは、リンが気を失っていてよかった、泣き顔を見られずに済んだと、少し安堵したのだった。
そのようすを背景に、アベルはエルザ・スコーピオを見下ろした。
「連邦警察アベル・ヨークだ。エルザ・スコーピオ。四十件を越える窃盗、二十三件の傷害罪・名誉毀損の疑いで、逮捕する」
がちゃん、と手錠が落ちた。
「これで、もう逃さない。お前は法によって裁かれるんだ」
アベルの声は怒りを押さえ込んだようだった。エルザが呆然としたまま、言った。
「まさかお前に捕まるなんてね。私の腕も、落ちたもんだわ」
「地元警察の踏ん張りのお陰だ。もっとも、今回の件はあんたらしくないが。警察を……親父を裏切ったあんたを、忘れたことはなかった」
エルザは何かを言おうとして、やめた。小さくかぶりを振って、ひたりと男を見据える。

「――ひとつ聞かせて。私たちを『売った』のは、だれ」
警察たちは目配せをする。話していいのか……、そんな逡巡が見え隠れした。エルザがふ、と笑う。暗い目に、不穏な光をにじませながら。
「私は、諦めないわ」
そこに、エドが警察を掻き分けて近づいた。下がりなさい、という警察をアベルが制する。エドはホッとして、エルザの前で少しかがんだ。
「教えてよ、怪盗さん。どうしてアイツを狙ったの。あのリュックを盗んだの。ランタンなんて用意して、なんのつもり」
エルザは探るようにエドを見つめ、「気まぐれよ」と答える。気色ばんだエドが詰め寄っても、エルザは動じない。冷静にエドを窺っている。自分が試されているような気分になり、エドは歯を食いしばった。拘束されている者への乱暴は、自分の価値を下げる気がしたのだ。
襟首をつかんだネコ族の少年は、睨みつけるに留めた。
「あんたの行動は半端すぎる。逃げるにしても、見つかるように逃げていたとしか思えない。列車に乗って逃亡したいわけじゃ、なかったんでしょ」
エルザは微笑した。
「いずれ、坊やたちにもわかるわ。私はこれでも、正義を掲げたい犯罪者なのだから」
自身を皮肉った彼女は、意味深げにエドを見つめるばかりだ。そこに何らかのメッセージが込められているように。
「それって当てこすり？」
さあ、とエルザがはぐらかす。問答は終わったと判断されたのか、エドの手がそっとエルザから外された。アベルが「もういいだろう」とエドを一瞥する。引っ立てられるエルザに、エドは付け足した。負け惜しみなのかもしれなかった。
「変装が下手だって言ったよね。イヌ族は、僕らの嫌いな臭いがす

るんだ。あなたの変装は、最初に会ったときからおかしかった」
剥ぎ取られたマスクの下にあったのは、四十に近い女の顔だった。とても怪盗の正体には見えないような、平凡なヒト族の。それが苦笑して、エトムントに向かって口を開く。だが、タイミング悪く足元から上がった歓声によって、その台詞もよく聞き取れない。
「坊やはエスツェット伯の……気をつけなさ……ダズは決して坊やの……」
なに、と聞き返そうとしたが、彼女は複数の警察によって連行されていく。エルザは一度エドを振り返ったが、すぐに人だかりによって隠れてしまった。十年間あちこちで怪盗騒動を巻き起こしてきた盗賊団の首魁(しゅかい)は、こうして捕まったのである。

9

わあああ、という歓声に、気を失っていたリンの意識が戻ってくる。な、に？　とつぶやいた少年は、がばりと起き上がると、傍らにあった自分の荷物を抱きしめた。そうしてホッと息をつく。

もうずいぶん辺りが暗くなっていた。少し前までは赤い光が世界を彩っていたはずなのに。

「目が覚めたかな」

フーリー警部補が街の中心部に向けていた目を、ゆっくりと少年に移した。リンは、戸惑いがちに「あの？」と問いかける。この歓声は何だろう。そしてドロボウは。

「エルザ・スコーピオは捕まった。もう、追いかけっこは終わったんだよ。それより――あっちをごらん」

指された方角を見て、リンは声を詰まらせた。街の中央広場にあった、あの巨大なランタンに灯りがともっている。そして、リンたちの見ている間にも、ぽつぽつと小さな灯りが徐々に広がっていくのだ。街全体をおおうように、オレンジの光があちらこちらであふれていく。

ランタン祭りがいよいよ始まった。太陽はもう地平線のかなたへと姿を消したのだ。世界をおおった闇が、かざされた光によって削り取られていく。冷たい風に身体を震わせながら、リンはこの静かで荘厳な祭りに魅入られた。なんて、なんてきれいなのだろう。

家々に飾られたランタンは形も色合いもさまざまで、ヴィーグエングの職人が丹精こめて作ったものだった。一つ一つをこの日のためだけに一年間作り上げ、街の住民が丁寧に磨き上げてきた。

「これはね、平和を祈る灯火（ともしび）なんだ。あの広場から分け与えられた火が、次の灯りになっていくんだよ」

傍らのフーリー警部補が誇りに満ちた声で、説明してくれた。戦争の終わりを願う人々の祈りなのだ、と。一番夜の長いこの時期だ

けは、こうしてヒトビトは過ごすのだ、と。
　丘の頂上付近から眺めた街のようすに、リンは立ちすくんだ。幻想的で心にしみこんできて、言葉が出なかったのだ。あの一つ一つがだれかの願いなんだ――そう思うと切ない気持ちでいっぱいになる。リンは故郷を思い出していた。この街のあたたかさが、家族と少しだけ似ていたから。
　だがそんな感傷も、エドの非難が横殴りに吹くまでだ。
「ちょっと。なにのん気に祭りを楽しんでんのさ！？」
　きょとん、としたリンが疑問を口にするより早く、走ってきたエドが自分の時計を突き出した。五時十分前を、針は示している。
「この星に置いてけぼりになっちゃうよ！　荷物持ったよね！？」
　仰天したリンをつかんでエドは走り出す。星間列車のステーションは、残念なことに街のはずれに建てられていた。遠すぎる！　この騒ぎを聞きとめたアベル・ヨークが「フーリー警部補！」と、何かをフーリーに向かって投げた。銀色に弧を描いて飛ぶそれを、片手でキャッチしてフーリーは驚いた。この街では禁止されているエアバイクのキーだったのだ。にやり、と男が笑う。ワルイコトを企む目で。
「今から走ったんじゃ間に合わない。教会へ走れ。空を使ったほうが断然速い！　バイクは、動かせるだろう？」
　はい、と女装中の刑事に礼をしたフーリーが、わたわたしている子どもたちへ猛然と走りよった。屋根からどう降りようと混乱しているちびっ子は、抱きかかえられてぎょっとする。
「いくよ。近道をしよう！」
「ちょっと、駅と反対方向――」
「いいから！　特別だ」
　フーリーに抱えられ、二人は街の頂上にある教会にたどり着いた。まだ、ここまで灯りは届いていない。小さな教会が三人を出迎える中、フーリーはどでかいバイクを発見し、エンジンをふかせた。少年たちを乗せると一気に勾配を駆け下りる。

「捕まって、空を行くよ！」
宣言するが早いか、ふわりとエアバイクは宙に浮いた。そのまま一気に街を下っていく。ひゃあああああ、とかうわあああああ、という悲鳴もまるで無視だった。
きらめく街の夜空を彩るには多少不恰好だっただろう。

ヴンっという音と共に、三人は駅前に降り立った。目を回す余裕もなく、フーリーに少年は抱えられる。駅員が駆け寄ってなにか文句を言ったが「はい、すみません！」とフーリーが生返事をして押し切った。来たときはあれほど混んでいたホームは閑散としていた。だれもが祭りへ行っているのだ。夜が本番なのだから当然か。
リンが身をひねってホームの時計を確認すると、五時まで残り五分もない。
「おいおいおい、どうしたってんだよ急げ急げ！　発車すんぞ！」
車掌のエリックがハラハラしたようすで、ぶんぶん手を招く。
「すみません！」
「間に合ってよかったなぁ。列車は刻限になったら行くしかないから、気をつけろよ。それほど楽しかったかい、この街は」
後半はやさしげに尋ねられて、エドとリンは顔を見合わせた。空笑いと、困った笑顔で。エリックは訝しげにしたが「まぁ急げや」と列車に乗り込んだ。フーリーが続いて足をかける二人に話しかける。
「今度はゆっくり遊びにおいで。また来年、ランタン祭りはあるからね。名物の工房通りは行ったかい？」
「そんな暇なかったですよ。でも祭りは奇麗でした」
「もっと見たかったです」
「だろう？　この街の自慢なんだ。ヴィーグエング（工芸の街）は客人をいつでも歓迎するよ。次回は自慢のファクトリーを見て欲し

い。あ、それと」
「おら、もたもたすんじゃない、急げっつったろ！　ドア閉めるから頭引っ込めろ！」
エリックが巨体を現した。フーリーが慌てて二人を押し込め、「これ、おみやげ。エルザが用意したものには及ばないけど」と、ウインクする。お礼を言う間も与えられず、目の前で扉は閉ざされた。二人は窓を探してかじりつく。
「あの、フーリーさん、これ――アベルさんに。それから、ありがとうございました」
窓から身を乗り出してリンがサングラスを手渡す。
「いっぱい、いっぱいありがとうございました！　ぼく――忘れません」
「送ってくれてありがとう、助かったよ警部補さん。警部に早く昇進できるよう頑張ってね」
「ありがとう！　キミたちの旅の無事を祈っているよ」
「お元気で――」
窓も封鎖され、列車発進のアナウンスが響きわたる。星間列車が星を渡る時刻になったようだ。もうもうと噴出す蒸気に軽い振動、ゆっくりと黒いフォルムが動き出す。フーリーは帽子を飛ばされないよう押さえつけた。子どもたち二人に向かって大きく手を振ってやる。
出会って数時間もないけれど、偶然に出会うことができた小さな戦友たちへ。
「またいつか、遊びにおいで」
列車が空へと続くレールの上を駆け出した。

「……で、なにもらったの？」
自分たちのコンパートメントに戻って早々、エドはリンに尋ねた。

リンはもらったものを見て笑顔をこぼす。そこにあったのは小さな小さなランタンだった。キーホルダーサイズでちろちろと灯りをともしている、ミニチュアである。――平和の灯火を、分けて貰えたのだ。

「安物だなぁ。僕らが目を付けた方くれたらよかったのに」

ぽん、とエドはランタンを投げてはキャッチする。エドの言ったように、二人が揉めたランタンに比べれば作りが荒い。細部へのこだわりが見当たらない、大量生産品だ。工房名も記されない、お手軽な土産物である。

だが、こんなものもあったのか、とエドは意外に思った。もしかしたら道行くヒトが気軽に付けていたランタンは、これだったのか。

「役に立たないね、これ。明かりが欲しければライトを照らせばいいんだし。点けても大して明るくないもの」

両手で暗がりを作って覗いていたリンは、嬉しそうにランタンをつついた。

「そう？　ぼくは、これがいい。これでいいよ」

にこにこしてランタンを眺めるのを見て、エドが決まり悪そうに離れていく。顔を背けたまま、ネコ族の少年は指定席代わりのシートに身を沈ませた。行儀のいい彼にしては珍しく、一人掛けのソファで丸くなっている。

しばらくランタンを二人は無言で眺めていたが、

「悪かったよ」

エドがぽつ、と誰にともなくつぶやいた。え、とリンが聞き返すと、

「悪かったって言ってるの。ほら、ランタンのこと……はぐれる前に……」

言いにくそうに喋るエドは、これでも謝っているのか。ソファの肘掛に頭を乗せ、手の中でミニランタンを転がして。しゅん、としていた。

リンは笑顔になった。

「いいよ、あれはもう。エドに悪気がなかったってわかっているから。プレゼントだって思ってくれたんでしょう？　ぼくのほうこそ……変にこだわったと言うか」
お金に無頓着なエドと違って、リンはあっさり大金を手放せない。差を見せ付けられたようで僻んでしまった面も、少なからずあったのだ。また、それが目的でエドと友だちになったのだと思われたら、悲しかった。対等の存在でいたかったのだ。
「ねぇ、どうして怒ったのか教えてくれる？」
エドがおずおずと問いかけてきた。もしよければ、なんて前置きが付きそうなぐらい、彼にしては弱気な態度だ。リンはしばらく言葉を探して沈黙した。
「強いて言うなら……、気持ち、かも」
気持ち、とエドが繰り返す。うん、と頷いてリンは続ける。
「上手く言えないんだけどね。誰かにどうしてあげたいって気持ちじゃないかなって。ぼくの場合は、いつもありがとうって気持ちと、みんなを喜ばせてあげたいって気持ち。それは、エドが買ったんじゃ意味がないんだ。そういうの、ないかなぁ」
自分でやらなきゃ意味がない、真心というもの。お金でその価値は測れない。それがエドには欠けていたのだ、とリンは指摘するのだ。ぽんと買って、ぽんと手渡そうとした。そのとき込められた気持ちの重さが、その人に対する思いの重さになる。エドがリンに込めた思いは、どれほどのものだっただろう？
エドが、「そっか……」と小さくつぶやいた。
欲しいと思ったものはほぼ手に入れてきたエドには、よくわからない答えだった。誰かからのプレゼントは、当然のように受け取ってきた。欲しいものはほとんど何でも手に入れた。軽々しく与えられ続けてきたせいで、誰かにプレゼントする行為自体が軽くなっていたのか。
「だからぼくは、フーリーさんが選んでくれたこのランタンでよかったなぁって思うの」

短時間のうちに、二人のために手配してくれたのか。それともたまたまランタンを持っていただけなのか、それはわからないけれど。
偶然出会った観光客に過ぎない子どもに、フーリーはやさしかった。またおいで、と再会を願って、平和のともし火を分けてくれた。お祭りをじっくり見れなかったことは残念だったし、荷物を盗まれて散々だったけど、この街を嫌わないで欲しい、とフーリーが言ってくれたように思えた。
そこに込められた気持ちが、あたたかいか。
小さな灯りたちが集まって、大きな光になっていくようすをリンは思い返した。空を飛びながら後ろを振り返れば、教会へと明かりが伸びていた。そして、古びた教会がランタンの明かりによって照らされた瞬間を。やわらかくて、あたたかな光に包まれた街を。同時にフーリーの誇らしげな表情も。
また絶対、この街を訪れたいと。
「本当、乗り遅れなくてよかったよね。大変だったけど、お土産までもらっちゃったし」
リンのとぼけた発言に、エドが顔をしかめる。
「能天気に言わないで、ちょっとは懲りてくれる？　かなり探したんだから」
再びずるずるとエドはソファに沈んでいく。その尻尾がぱたぱたと揺れるのを、リンは見つめて話しかけた。
「ねえ、エド」
「なに」
「今日は、ありがとう。とっても、とっても、うれしかった。ありがとう」
一緒にかばんを取り返してくれて。
勢いよくエドが身を起こした。
「お礼を言われるほどのことじゃないけど」
「ううん、エドがいなかったらダメだった！」
エドは「僕は……」とつぶやいたっきり、膨れ面を作って、リン

から顔をそらした。ソファに寝そべったまま、ランタンを指でいじっている。
あのとき、エドが「取り戻すよ、絶対」と言ってくれなければ、リンは諦めていたかもしれない。一緒に追いかけてくれなければ、途方にくれて終わっていたかもしれない。この街に、置き去りにされていたのかも。
フーリーやアベルの助けもあったが、「やれることをする。――諦めないで」と庇ってくれた背中がなければ、泣きじゃくるだけだった。エドの不屈な精神に触れていれば、自分も何かできるかもしれない、と勇気をもらえたのだ。
素っ気なくエドが「どういたしまして」と言った。不機嫌さを装う態度は、照れ隠しだったのだろうか。
「ねぇエド、次はどこだっけ。どんな駅なの？」
「オーウェイン。白と黒の王国だよ。トリビトのいる、ね」
トリビト、とリンが驚きに軽く目を見開き、複雑そうな顔をした。
「そっかぁ。トリビトに、会えるんだね……」

小さな小さなランタンがふたりを照らし出した。

てがみ

大好きなアニエスとみんなへ。

お元気ですか？　ぼくはとても元気です。

工芸の街、ヴィーグエングへ行きました。エンジャーグルから二つ目の駅です。そこではランタン祭りが行われてました。楽しめたのはちょっとだけでしたが、とっても街がきれいでした。

そこで、アベルさんとフーリーさんと知り合いました。

アベルさんはかっこいいですけれど、よくわからなかったです。フーリーさんはウサギ族のヒトでした。二人ともとってもいいヒトで、かばんを探すのを手伝ってくれました。なんだか色々あって、ちょっとよくわからないんだけど、楽しかったなぁと思いました。屋根の上とか走りました。空も飛んだんです。すごいでしょう？

それからフーリーさんからおみやげに、ちっちゃなランタンをひとつ、もらいました。アニエスが好きだろうなぁと思います。

今日は、アニエスやみんなを思い出しました。早く帰って、アニエスに会いたいです。

いろんなことがたくさんあってアニエスにお話したいです。会いたいです。

次の街は、トリビトの街なのだそうです。

では、またお手紙出します。

お元気で。

リン・ユイより。

てがみ（後書き）

二章『工芸と迷宮の街』を最後まで読んでくださって、ありがとうございました。
ご感想やご意見をお待ちしております。

橘高有紀

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n9786i/

工芸と迷宮の街

2010年10月8日15時25分発行